

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第365集

比企郡川島町

元宿遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
川島地区埋蔵文化財発掘調査報告

2009

国土交通省 関東地方整備局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 元宿遺跡全景 (南東から)



2 元宿遺跡遠景 (北東から)



1 第1号方形周溝墓出土土器



2 第4号住居跡出土土器



1 肥前系の陶磁器



2 瀬戸・美濃系の陶磁器

元宿遺跡の紹介

元宿遺跡は、埼玉県のほぼ中央に当たる荒川低地に位置する川島町にあります。川島町は周囲を、荒川をはじめ入間川、越辺川、都幾川、市野川等の河川に囲まれています。町内の地理的特徴として、過去に形成された大きく蛇行する河川の跡と、これと並行する自然堤防が現在に至るまでよく残っています。

元宿遺跡は、こうした自然堤防の一つで発見されました。遺跡からは縄文土器が出土しており、縄文時代後期（約3,000年前）以前に、この自然堤防が形成されていたことがわかります。

さらに古墳時代、そして古代から中・近世に亘る、さまざまな遺構や遺物がみられました。

残念ながら、遺跡名のもととなっている地名「元宿」を証明する遺構や遺物はみつきませんでした。

序

埼玉県では、社会経済活動の広域化や、自動車保有台数の増加などに伴って交通量が増加し、県内各地で交通渋滞が慢性化しています。県では「地域の魅力、創造戦略」の一環として、渋滞のない円滑な自動車交通の実現を目指した交通網の整備を進めています。

国土交通省が進める一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の新設事業もその一つであり、都心からの放射状道路をつなぐ環状の道路を整備することにより、首都圏全体の道路交通の円滑化を目指すものであります。

さて、圏央道が町域を東西に貫く比企郡川島町では、その建設予定地内いくつかの遺跡が存在しており、元宿遺跡もそのひとつであります。埋蔵文化財の取り扱いに関しては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、縄文時代から古墳時代、さらに古代から中・近世に至る遺構や遺物が多数発見されました。特に、古墳時代では方形周溝墓や、建物に伴う施設と思われる周溝状遺構が多数発見されました。特に周溝状遺構は、低地遺跡で発見されることが多く、本遺跡の特徴の一つといえます。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、普及、啓発および各教育機関の参考資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所をはじめとして、埼玉県市町村支援部生涯学習文化財課、川島町教育委員会、ならびに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成21年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、比企郡川島町に所在する元宿遺跡（第1・2次）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と、代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

元宿遺跡（略号MTJK、遺跡番号No37-021）
埼玉県比企郡川島町大字三保谷字元宿326-6番地他（第1次）
埼玉県比企郡川島町大字三保谷字元宿388-2番地他（第2次）
発掘調査に対する指示通知：
平成17年8月9日付け教文第2-46号
平成18年4月26日付け教文第2-5号
発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 本事業は、I-3に示す組織により実施した。発掘調査期間と調査担当者は以下のとおりである。

元宿遺跡（第1次）
平成17年8月1日～平成18年3月31日
調査担当者 鈴木孝之 新屋雅明
福田 聖 上野真由美 松本美佐子
村端和樹

元宿遺跡（第2次）
平成18年4月10日～平成18年4月28日
調査担当者 坂野和信 小野美代子
黒坂領二
4. 整理・報告書作成事業の期間と担当者は以下のとおりである。

平成20年5月1日～平成21年3月24日
整理担当者 鈴木孝之
平成21年4月8日～平成21年9月30日
整理担当者 鈴木孝之
5. 遺跡の基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。
6. 遺跡の空中写真は、株式会社GIS関東に委託した。
7. 木製品の樹種同定は、独立行政法人森林総合研究所に委託した。
8. 土壌サンプルのリン・カルシウム分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
9. 遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、遺物写真撮影は鈴木が行った。
10. 出土遺物の整理および図版の作成は鈴木が行い、宮井英一 上野真由美の協力を得た。また、縄文時代の土器・石器の実測は上野が行った。
11. 本書の編集は鈴木が行った。本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、IV章の1とV章の2を上野真由美、3を福田 聖、4を岡田勇介、5を大和田 暉が行い、それ以外を鈴木が行った。
12. 本書にかかる資料は平成21年度以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
13. 発掘調査から報告書の刊行まで、下記の機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）
川島町教育委員会

凡例

1. 本書中におけるX・Yの数値は、世界測地系による平面直角座標IX系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく座標値を示し、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10m×10mを基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西からアラビア数字（1・2・3…）、南北方向は北からアルファベット（A・B・C…）を付し、両者を組み合わせA-1、B-2等の名称と呼称した。元宿遺跡のK-10グリッド北西杭の世界測地系X=-1419.999、Y=-30160.000（北緯35°59'12" 2458東経139°29'55" 8735）である。
4. 調査の工程上、複数の調査区を並行して調査したため、遺構番号の重複を避けるべく番号を離して命名した。そのため、遺構番号が大きく離れる結果となったが、原則として調査時に付した遺構番号をそのまま用いた。
5. 発掘調査時に付した遺構番号を尊重し、遺構番号順に編集したため、時期別の配列ではない。
6. 本文中に使用した略号は以下のとおりである。
 S J 竪穴住居跡 SB 掘立柱建物跡
 SR 周溝状遺構 SH 方形周溝墓
 SK 土壌 SE 井戸跡
 SX 性格不明遺構 SD 溝跡
 SA 欄列跡 GP グリッドピット
7. 遺構図および実測図の縮尺は、各挿図中に縮尺率とスケールを示した。同一図中に縮尺の異なる場合は、図中にその都度例示した。

遺構 全体図 1/1500 1/200

竪穴住居跡 1/60・1/30

方形周溝墓 1/60・1/80

掘立柱建物跡・土壌・井戸跡

・欵状遺構 1/60

周溝状遺構 1/80

溝跡 1/200・1/60・1/30

遺物実測図

縄文土器・陶磁器・漆器 1/3

金属製品 1/2・1/4

土器 1/3・1/4

石製品 1/2・1/3・1/6

木製品 1/6・1/8・1/10

拓影図 1/3・1/4

8. 胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で記した。
 A-白色粒子 B-角閃石 C-石英 D-雲母状微粒子 E-長石 F-赤色粒子 G-黒色粒子 H-白色針状物質 I-片岩 J-砂粒子 K-小礫 L-その他
9. 文中や観察表中の（ ）内の数値は復元推定値、[]内の数値は残存値を意味する。
10. 遺物の残存率は、図示した部分についてのおよその残存率を5%刻みで示した。
11. 遺物の焼成については、数値での表現が難しいため、良好・普通・不良の3段階で表す。
12. 挿図中、漆製品の上位置または下位置の○は赤漆、●は黒漆、△は金、▲は銀を示す。
13. 遺構断面図に表記した水準値は海拔標高で、単位はmである。
14. 遺物実測図中の網掛けは、銅緑釉10%、赤彩30%、油煙40%である。
15. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000の地形図（大宮・鴻巣・熊谷・川越）を使用した。
16. 本書に使用した引用・参考文献は、著者・発行年の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に一覧に掲載した。
17. 自然科学分析中の挿図・表は連番ではない。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	9. 溝跡 (古墳時代)	259
1. 発掘調査に至る経過	1	10. 性格不明遺構 (中・近世)	312
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	11. 畝状遺構	327
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	12. グリッドピット	328
II 遺跡の立地と環境	5	13. グリッド出土遺物	333
1. 地理的環境	5	14. 自然科学分析	350
2. 歴史的環境	7	(1) リン・カルシウム分析	350
III 遺跡の概要	11	(2) 樹種同定	354
IV 遺構と遺物	26	V 調査のまとめ	365
1. 縄文時代の遺構と遺物	26	1. 元宿遺跡の調査成果	365
2. 住居跡 (古墳時代～古代)	30	2. 元宿遺跡と川島町の縄文時代の遺跡	366
3. 周溝状遺構 (古墳時代)	65	3. 古墳時代前期	368
4. 方形周溝墓 (古墳時代)	78	4. 古墳時代後期から奈良・平安時代における 元宿遺跡の変遷過程	374
5. 掘立柱建物跡 (古墳時代～中・近世)	89	5. 元宿遺跡出土の木製品について	380
6. 櫛列跡	147	6. 元宿遺跡の中・近世について	382
7. 土壌 (古墳時代～中・近世)	149		
8. 井戸跡 (古墳時代～中・近世)	215	写真図版	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	5	第10図 区割図 (4)	17
第2図 遺跡周辺の地形	6	第11図 区割図 (5)	18
第3図 周辺の遺跡 (縄文・古墳)	8	第12図 区割図 (6)	19
第4図 基本土層図	10	第13図 区割図 (7)	20
第5図 遺跡の位置	12	第14図 区割図 (8)	21
第6図 遺跡全体区割図1/1500	13	第15図 区割図 (9)	22
第7図 区割図 (1)	14	第16図 区割図 (10)	23
第8図 区割図 (2)	15	第17図 区割図 (11)	24
第9図 区割図 (3)	16	第18図 区割図 (12)	25

第19図	第284号土壌・出土遺物	26	第56図	第14号住居跡出土遺物	61
第20図	縄文時代の遺物(1)	28	第57図	第15号住居跡	61
第21図	縄文時代の遺物(2)	29	第58図	第16号住居跡	62
第22図	住居跡分布図	30	第59図	第17・18号住居跡(1)	63
第23図	第1・2・11号住居跡	31	第60図	第17・18号住居跡(2)	64
第24図	第3号住居跡	32	第61図	周溝状遺構分布図	65
第25図	第3号住居跡カマド・貯蔵穴	33	第62図	第1号周溝状遺構	66
第26図	第3号住居跡遺物出土状況	34	第63図	第2号周溝状遺構	67
第27図	第3号住居跡出土遺物(1)	35	第64図	第3号周溝状遺構	68
第28図	第3号住居跡出土遺物(2)	36	第65図	第1～3号周溝状遺構出土遺物	69
第29図	第4号住居跡	37	第66図	第4号周溝状遺構出土遺物	69
第30図	第4号住居跡カマド・貯蔵穴	38	第67図	第4号周溝状遺構	70
第31図	第4号住居跡カマド遺物出土状況	38	第68図	第5号周溝状遺構	71
第32図	第4号住居跡出土遺物(1)	39	第69図	第5号周溝状遺構出土遺物	72
第33図	第4号住居跡出土遺物(2)	40	第70図	第6号周溝状遺構	73
第34図	第5号住居跡・カマド	42	第71図	第7号周溝状遺構	74
第35図	第5号住居跡出土遺物	43	第72図	第8号周溝状遺構	75
第36図	第6号住居跡	45	第73図	第9号周溝状遺構	75
第37図	第6号住居跡カマド・貯蔵穴	46	第74図	第10号周溝状遺構	76
第38図	第6号住居跡出土遺物	46	第75図	第7～10号周溝状遺構出土遺物	77
第39図	第7号住居跡	47	第76図	第11号周溝状遺構	77
第40図	第7号住居跡出土遺物	47	第77図	方形周溝墓分布図	78
第41図	第8号住居跡	48	第78図	第1号方形周溝墓	79
第42図	第8号住居跡出土遺物	49	第79図	第1号方形周溝墓遺物出土状況	80
第43図	第9号住居跡	50	第80図	第1号方形周溝墓出土遺物	80
第44図	第9号住居跡カマド・貯蔵穴	51	第81図	第2号方形周溝墓	81
第45図	第9号住居跡出土遺物	52	第82図	第2号方形周溝墓出土遺物	82
第46図	第10号住居跡・カマド	53	第83図	第3号方形周溝墓	83
第47図	第10号住居跡(掘方)	54	第84図	第3号方形周溝墓出土遺物	84
第48図	第10号住居跡カマド遺物出土状況	54	第85図	第4号方形周溝墓出土遺物	84
第49図	第10号住居跡出土遺物	55	第86図	第4号方形周溝墓	85
第50図	第12号住居跡・第1号土壌	56	第87図	第5号方形周溝墓	86
第51図	第12号住居跡(掘方)	57	第88図	第5号方形周溝墓出土遺物	86
第52図	第12号住居跡出土遺物	57	第89図	第6号方形周溝墓	87
第53図	第13号住居跡	58	第90図	第6号方形周溝墓遺物出土状況	88
第54図	第14号住居跡(1)	59	第91図	第6号方形周溝墓出土遺物	88
第55図	第14号住居跡(2)	60	第92図	掘立柱建物跡分布図	89

第93图	第1号掘立柱建物跡	90	第130图	第65号掘立柱建物跡	126
第94图	第2号掘立柱建物跡	91	第131图	第66号掘立柱建物跡(1)	127
第95图	第3号掘立柱建物跡	92	第132图	第66号掘立柱建物跡(2)	128
第96图	第4号掘立柱建物跡	93	第133图	第67号掘立柱建物跡	128
第97图	第5号掘立柱建物跡	94	第134图	第68号掘立柱建物跡	129
第98图	第6号掘立柱建物跡	95	第135图	第69号掘立柱建物跡	130
第99图	第7号掘立柱建物跡	96	第136图	第70号掘立柱建物跡(1)	131
第100图	第8号掘立柱建物跡	97	第137图	第70号掘立柱建物跡(2)	132
第101图	第9号掘立柱建物跡	98	第138图	第71号掘立柱建物跡	133
第102图	第10号掘立柱建物跡	99	第139图	第72号掘立柱建物跡(1)	134
第103图	第11号掘立柱建物跡	100	第140图	第72号掘立柱建物跡(2)	135
第104图	第12号掘立柱建物跡	101	第141图	第73号掘立柱建物跡(1)	136
第105图	第13号掘立柱建物跡	102	第142图	第73号掘立柱建物跡(2)	137
第106图	第14号掘立柱建物跡	103	第143图	第74号掘立柱建物跡	138
第107图	第15号掘立柱建物跡	104	第144图	第75号掘立柱建物跡(1)	139
第108图	第16号掘立柱建物跡	105	第145图	第75号掘立柱建物跡(2)	140
第109图	第17号掘立柱建物跡	106	第146图	第76号掘立柱建物跡	141
第110图	第18号掘立柱建物跡	107	第147图	第77号掘立柱建物跡	142
第111图	第19号掘立柱建物跡	108	第148图	第78号掘立柱建物跡	143
第112图	第51号掘立柱建物跡	109	第149图	第79号掘立柱建物跡	144
第113图	第52号掘立柱建物跡	110	第150图	第80号掘立柱建物跡	145
第114图	第53号掘立柱建物跡	111	第151图	掘立柱建物跡出土遺物	146
第115图	第54号掘立柱建物跡	112	第152图	柵列跡分布図	147
第116图	第55号掘立柱建物跡	113	第153图	第1号柵列跡	147
第117图	第56号掘立柱建物跡(1)	114	第154图	第2・3号柵列跡	148
第118图	第56号掘立柱建物跡(2)	115	第155图	土壤分布図	149
第119图	第57号掘立柱建物跡(1)	116	第156图	土壤(1)	150
第120图	第57号掘立柱建物跡(2)	117	第157图	土壤(2)	153
第121图	第58号掘立柱建物跡	118	第158图	土壤(3)	155
第122图	第59号掘立柱建物跡	119	第159图	土壤(4)	156
第123图	第60号掘立柱建物跡(1)	120	第160图	土壤(5)	159
第124图	第60号掘立柱建物跡(2)	121	第161图	土壤(6)	160
第125图	第61号掘立柱建物跡	121	第162图	土壤(7)	162
第126图	第62号掘立柱建物跡	122	第163图	土壤(8)	165
第127图	第63号掘立柱建物跡(1)	123	第164图	土壤(9)	166
第128图	第63号掘立柱建物跡(2)	124	第165图	土壤(10)	168
第129图	第64号掘立柱建物跡	125	第166图	土壤(11)	170

第167图	土壤 (12)	172	第204图	井戸跡出土遺物 (2)	234
第168图	土壤 (13)	173	第205图	井戸跡出土遺物 (3)	235
第169图	土壤 (14)	175	第206图	井戸跡出土遺物 (4)	236
第170图	土壤 (15)	177	第207图	井戸跡出土遺物 (5)	237
第171图	土壤 (16)	179	第208图	井戸跡出土遺物 (6)	238
第172图	土壤 (17)	181	第209图	井戸跡出土遺物 (7)	239
第173图	土壤 (18)	183	第210图	井戸跡出土遺物 (8)	240
第174图	土壤 (19)	185	第211图	井戸跡出土遺物 (9)	241
第175图	土壤 (20)	187	第212图	井戸跡出土遺物 (10)	242
第176图	土壤 (21)	189	第213图	井戸跡出土遺物 (11)	243
第177图	土壤 (22)	191	第214图	井戸跡出土遺物 (12)	244
第178图	土壤 (23)	194	第215图	井戸跡出土木製品 (1)	249
第179图	土壤 (24)	194	第216图	井戸跡出土木製品 (2)	250
第180图	土壤出土遺物 (1)	198	第217图	井戸跡出土木製品 (3)	251
第181图	土壤出土遺物 (2)	199	第218图	井戸跡出土木製品 (4)	252
第182图	土壤出土遺物 (3)	200	第219图	井戸跡出土木製品 (5)	253
第183图	土壤出土遺物 (4)	201	第220图	井戸跡出土木製品 (6)	254
第184图	土壤出土遺物 (5)	202	第221图	井戸跡出土木製品 (7)	255
第185图	土壤出土遺物 (6)	203	第222图	井戸跡出土木製品 (8)	256
第186图	土壤出土遺物 (7)	204	第223图	溝跡区割図	259
第187图	土壤出土遺物 (8)	205	第224图	溝跡区割図 (1)	260
第188图	土壤出土遺物 (9)	206	第225图	溝跡断面図 (1)	261
第189图	土壤出土遺物 (10)	207	第226图	溝跡区割図 (2)	264
第190图	井戸跡分布図	215	第227图	溝跡断面図 (2)	265
第191图	井戸跡 (1)	216	第228图	溝跡区割図 (3)	266
第192图	井戸跡 (2)	218	第229图	溝跡断面図 (3)	267
第193图	井戸跡 (3)	219	第230图	溝跡区割図 (4)	270
第194图	井戸跡 (4)	221	第231图	溝跡断面図 (4)	271
第195图	井戸跡 (5)	222	第232图	溝跡断面図 (5)	272
第196图	井戸跡 (6)	223	第233图	溝跡区割図 (5)	276
第197图	井戸跡 (7)	225	第234图	溝跡断面図 (6)	277
第198图	井戸跡 (8)	227	第235图	溝跡区割図 (6)	280
第199图	井戸跡 (9)	228	第236图	溝跡断面図 (7)	281
第200图	井戸跡 (10)	229	第237图	溝跡断面図 (8)	282
第201图	井戸跡 (11)	230	第238图	溝跡断面図 (9)	283
第202图	井戸跡 (12)	231	第239图	溝跡区割図 (7)	286
第203图	井戸跡出土遺物 (1)	233	第240图	溝跡断面図 (10)	287

第241図	溝跡断面図 (11)	288	第268図	第1号欒状遺構	327
第242図	第41~43号溝跡遺物出土状況	293	第269図	グリッド・ピット (1)	328
第243図	溝跡出土遺物 (1)	294	第270図	グリッド・ピット (2)	329
第244図	溝跡出土遺物 (2)	295	第271図	グリッド・ピット (3)	330
第245図	溝跡出土遺物 (3)	296	第272図	グリッド・ピット (4)	331
第246図	溝跡出土遺物 (4)	297	第273図	グリッド・ピット (5)	332
第247図	溝跡出土遺物 (5)	298	第274図	グリッド出土遺物 (1)	333
第248図	溝跡出土遺物 (6)	299	第275図	グリッド出土遺物 (2)	334
第249図	溝跡出土遺物 (7)	300	第276図	グリッド出土遺物 (3)	335
第250図	溝跡出土遺物 (8)	301	第277図	グリッド出土遺物 (4)	336
第251図	溝跡出土遺物 (9)	302	第278図	グリッド出土遺物 (5)	337
第252図	溝跡出土遺物 (10)	303	第279図	グリッド出土遺物 (6)	338
第253図	溝跡出土遺物 (11)	304	第280図	グリッド出土遺物 (7)	339
第254図	溝跡出土木製品	311	第281図	グリッド出土遺物 (8)	340
第255図	性格不明遺構分布図	312	第282図	グリッド出土遺物 (9)	341
第256図	第1号性格不明遺構	313	第283図	グリッド出土遺物 (10)	342
第257図	第1号性格不明遺構出土遺物 (1)	314	第284図	グリッド出土遺物 (11)	343
第258図	第1号性格不明遺構出土遺物 (2)	315	第285図	川島町の縄文時代の遺跡分布と土器	367
第259図	第2号性格不明遺構	317	第286図	古墳時代前期の土器	368
第260図	第2号性格不明遺構出土遺物	318	第287図	元宿遺跡の周溝墓と周溝	370
第261図	第3号性格不明遺構	319	第288図	周溝の幅と深さ	371
第262図	第3号性格不明遺構出土遺物 (1)	320	第289図	器種構成	371
第263図	第3号性格不明遺構出土遺物 (2)	321	第290図	構内土壌のサンプリング位置	373
第264図	第3号性格不明遺構出土遺物 (3)	322	第291図	遺構変遷図 (1)	374
第265図	第4・6号性格不明遺構出土遺物	324	第292図	遺構変遷図 (2)	376
第266図	第4号性格不明遺構	325	第293図	遺構変遷図 (3)	377
第267図	第5・6号性格不明遺構	326	第294図	出土遺物編年図 (1)	378
			第295図	出土遺物編年図 (2)	379
			第296図	掘立柱建物跡の主軸方位・規模と溝跡 方位	383
			第297図	掘立柱建物跡分布図	384

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	10	第2表	第3号住居跡出土遺物観察表	34
-----	---------------	----	-----	---------------------	----

第3表	第4号住居跡出土遺物観察表	……40・41	第21表	第6号方形周溝墓出土遺物観察表	……88
第4表	第5号住居跡出土遺物観察表	……44	第22表	掘立柱建物跡出土遺物観察表	……144
第5表	第6号住居跡出土遺物観察表	……46	第23表	土壌一覽表	……197
第6表	第7号住居跡出土遺物観察表	……47	第24表	土壌出土遺物観察表	……208~214
第7表	第8号住居跡出土遺物観察表	……49	第25表	井戸跡計測表	……232
第8表	第9号住居跡出土遺物観察表	……51・52	第26表	井戸跡出土遺物観察表	……244~248
第9表	第10号住居跡出土遺物観察表	……55	第27表	井戸跡出土木製品観察表	……256~258
第10表	第12号住居跡出土遺物観察表	……58	第28表	溝跡出土遺物観察表	……304~310
第11表	第14号住居跡出土遺物観察表	……61	第29表	溝跡出土木製品観察表	……311
第12表	第1~3号周溝状遺構出土遺物観察表	……69	第30表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表	……316・317
第13表	第4号周溝状遺構出土遺物観察表	……69	第31表	第2号性格不明遺構出土遺物観察表	……318
第14表	第5号周溝状遺構出土遺物観察表	……72	第32表	第3号性格不明遺構出土遺物観察表	……323・324
第15表	第7~10号周溝状遺構出土遺物観察表	……76	第33表	第4・6号性格不明遺構出土遺物観察表	……324
第16表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	……81	第34表	グリッド出土遺物観察表	……344~349
第17表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表	……81	第35表	元宿遺跡の周溝墓と周溝	……369
第18表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表	……84			
第19表	第4号方形周溝墓出土遺物観察表	……84			
第20表	第5号方形周溝墓出土遺物観察表	……86			

写真図版目次

図版1	A区全景 調査開始前	第4号住居跡 カマド
	A区全景 調査中	第4号住居跡遺物出土状況
	A区現況	図版7
図版2	A区全景 (北から)	第4号住居跡 P4 遺物出土状況
	A区全景 (南から)	第5号住居跡
	B区全景 (東から)	第5号住居跡遺物出土状況
図版3	C区全景遺構確認状況 (西から)	図版8
	C区全景 (東から)	第6号住居跡
	第1・2号住居跡	第7号住居跡
図版4	第3号住居跡遺物出土状況	第8号住居跡
	第3号住居跡 カマド	図版9
	第3号住居跡遺物出土状況	第9号住居跡
図版5	第3号住居跡 貯蔵穴	第9号住居跡 カマド
	第3号住居跡遺物出土状況	第9号住居跡遺物出土状況
図版6	第4号住居跡	図版10
		第9号住居跡 貯蔵穴
		第10号住居跡
		第10号住居跡カマド遺物出土状況
		図版11
		第12号住居跡

	第13号住居跡	図版24	第16号掘立柱建物跡
	第14号住居跡		第17号掘立柱建物跡
図版12	第14号住居跡 カマド		第18号掘立柱建物跡
	第1号周溝状遺構	図版25	第19号掘立柱建物跡
	第2号周溝状遺構		第51号掘立柱建物跡
図版13	第3号周溝状遺構	図版26	第52号掘立柱建物跡
	第4・6号周溝状遺構		第55号掘立柱建物跡
	第5号周溝状遺構		第56号掘立柱建物跡
図版14	第5号周溝状遺構遺物出土状況		第57・63号掘立柱建物跡
	第7号周溝状遺構	図版27	第58・59号掘立柱建物跡
図版15	第8号周溝状遺構		第60号掘立柱建物跡
	第8号周溝状遺構遺物出土状況		第61号掘立柱建物跡
	第9号周溝状遺構	図版28	第62号掘立柱建物跡
図版16	第9号周溝状遺構遺物出土状況		第64号掘立柱建物跡
	第10号周溝状遺構		第65・66号掘立柱建物跡
	第11号周溝状遺構	図版29	第67号掘立柱建物跡
図版17	第1号方形周溝墓		第68号掘立柱建物跡
	第1号方形周溝墓遺物出土状況		第69号掘立柱建物跡
図版18	第1号方形周溝墓遺物出土状況	図版30	第70号掘立柱建物跡
	第2号方形周溝墓		第71・72号掘立柱建物跡
	第2号方形周溝墓遺物出土状況		第73号掘立柱建物跡
図版19	第3号方形周溝墓	図版31	第74号掘立柱建物跡
	第4号方形周溝墓		第75号掘立柱建物跡
	第6号方形周溝墓		第76号掘立柱建物跡
図版20	第6号方形周溝墓溝内土壌	図版32	第77号掘立柱建物跡
	土壌サンプリングの準備状況		第78号掘立柱建物跡
	第6号方形周溝墓溝内土壌 (完掘)		第79号掘立柱建物跡
	第6号方形周溝墓遺物出土状況	図版33	第80号掘立柱建物跡
図版21	第1号掘立柱建物跡		第1号柵列跡
	第1・2・4号掘立柱建物跡		第2号柵列跡
	第5号掘立柱建物跡	図版34	第29・30号土壌
図版22	第6・12・13・15号掘立柱建物跡		第39号土壌
	第9号掘立柱建物跡		第41号土壌
	第10号掘立柱建物跡		第52・53・54号土壌
図版23	第11号掘立柱建物跡		第60号土壌
	第14号掘立柱建物跡		第82号土壌
	第15号掘立柱建物跡		第90号土壌遺物出土状況

	第90号土壤	第69号井戸跡
図版35	第92号土壤	第69号井戸跡 木製品
	第93号土壤	第69号井戸跡 井戸側
	第95号土壤	図版40 第70号井戸跡木製品出土状況
	第101号土壤遺物出土状況	第70号井戸跡遺物出土状況
	第104号土壤	第71号井戸跡
	第105号土壤	第75号井戸跡
	第109・110号土壤	第77号井戸跡
図版36	第115号土壤礫出土状況	第78号井戸跡
	第126号土壤	第79号井戸跡
	第130・161号土壤	図版41 第1号溝跡
	第135号土壤遺物出土状況	第22号溝跡
	第138・139号土壤遺物出土状況	第24・34・50号溝跡
	第225号土壤	図版42 第26号溝跡 北側
	第271号土壤	第26・40・167号溝跡
	第277号土壤	第40号溝跡遺物出土状況
図版37	第284号土壤	図版43 第41号溝跡遺物出土状況
	第289・293・294号土壤	第41・42・43号溝跡遺物出土状況
	第13号井戸跡	第42・43号溝跡遺物出土状況
	第19号井戸跡 半截	図版44 第57号溝跡
	第20号井戸跡	第57号溝跡遺物出土状況
	第20号井戸跡 板碑	第69号溝跡遺物出土状況
	第21号井戸跡	図版45 第70・85号溝跡 第4号性格不明遺構
	第22・23・27号井戸跡	第74号溝跡遺物出土状況
図版38	第26・28号井戸跡	第87号溝跡遺物出土状況
	第27号井戸跡	図版46 第123号溝跡 木製品出土状況
	第27号井戸跡 下駄	第123号溝跡漆器出土状況
	第32号井戸跡	第11号井戸跡 第1号性格不明遺構
	第39号井戸跡 焼塩壺	図版47 第3・4・5号性格不明遺構
	第45号井戸跡	第5号性格不明遺構
	第45号井戸跡遺物出土状況	第6号性格不明遺構
	第49号井戸跡 曲物底板	図版48 C-17G P33板碑出土状況
図版39	第61号井戸跡	E-18G P82柱材出土状況
	第61号井戸跡 石臼	E-19G P3遺物出土状況
	第63号井戸跡	図版49 I-9G P4遺物出土状況
	第64号井戸跡	M-6G P40遺物出土状況
	第65号井戸跡	N-6G P33紡錘車出土状況

- | | | | |
|------|---|------|--|
| 图版50 | 第284号土城出土遗物
繩文土器
繩文石器 | | 第135号土城出土遗物
第139号土城出土遗物 |
| 图版51 | 第3号住居跡出土遺物 | 图版62 | 第139号土城出土遺物
第210号土城出土遺物 |
| 图版52 | 第3号住居跡出土遺物
第4号住居跡出土遺物 | | 第217号土城出土遺物
第238号土城出土遺物 |
| 图版53 | 第4号住居跡出土遺物 | | 第271号土城出土遺物 |
| 图版54 | 第5号住居跡出土遺物
第7号住居跡出土遺物
第8号住居跡出土遺物
第9号住居跡出土遺物 | 图版63 | 第277号土城出土遺物
第290号土城出土遺物
第345号土城出土遺物
第5号井戸跡出土遺物 |
| 图版55 | 第9号住居跡出土遺物
第10号住居跡出土遺物
第12号住居跡出土遺物 | 图版64 | 第15号井戸跡出土遺物
第29号井戸跡出土遺物
第22号井戸跡出土遺物
第27号井戸跡出土遺物 |
| 图版56 | 第3号周溝狀遺構出土遺物
第4号周溝狀遺構出土遺物
第5号周溝狀遺構出土遺物 | 图版65 | 第29号井戸跡出土遺物
第32号井戸跡出土遺物
第37号井戸跡出土遺物
第39号井戸跡出土遺物 |
| 图版57 | 第5号周溝狀遺構出土遺物
第8号周溝狀遺構出土遺物
第1号方形周溝墓出土遺物 | 图版66 | 第39号井戸跡出土遺物
第44号井戸跡出土遺物
第45号井戸跡出土遺物 |
| 图版58 | 第2号方形周溝墓出土遺物
第4号方形周溝墓出土遺物
第5号方形周溝墓出土遺物
第6号方形周溝墓出土遺物 | 图版67 | 第54号井戸跡出土遺物
第62号井戸跡出土遺物
第64号井戸跡出土遺物
第70号井戸跡出土遺物 |
| 图版59 | 第6号方形周溝墓出土遺物
第57号掘立柱建物跡出土遺物
第18号土城出土遺物
第18·19号土城出土遺物
第29号土城出土遺物
第31号土城出土遺物
第41号土城出土遺物 | 图版68 | 第1号溝跡出土遺物 |
| 图版60 | 第68·69号土城出土遺物
第90号土城出土遺物 | 图版69 | 第1号溝跡出土遺物 |
| 图版61 | 第90号土城出土遺物
第122号土城出土遺物
第126号土城出土遺物
第132号土城出土遺物 | 图版70 | 第1号溝跡出土遺物 |
| | | 图版71 | 第1号溝跡出土遺物
第14号溝跡出土遺物
第16号溝跡出土遺物 |
| | | 图版72 | 第16号溝跡出土遺物
第17号溝跡出土遺物 |
| | | 图版73 | 第17号溝跡出土遺物
第23号溝跡出土遺物 |

	第28号溝跡出土遺物		肥前系の磁器
	第32号溝跡出土遺物		高台銘のある肥前系の磁器
	第40号溝跡出土遺物	図版92	瀬戸・美濃系の陶器
	第41号溝跡出土遺物	図版93	玉類・硯および紡錘車
図版74	第41号溝跡出土遺物		砥石
	第42号溝跡出土遺物	図版94	第48号井戸跡出土遺物
	第43号溝跡出土遺物		第17号溝跡出土遺物
図版75	第43号溝跡出土遺物		第20号井戸跡出土遺物
図版76	第43号溝跡出土遺物		第31号井戸跡出土遺物
	第46号溝跡出土遺物		C-17グリッド出土遺物
	第48号溝跡出土遺物		第20号井戸跡出土遺物
	第54号溝跡出土遺物	図版95	第1号性格不明遺構出土遺物
図版77	第54号溝跡出土遺物		第33号井戸跡出土遺物
	第57号溝跡出土遺物		第61号井戸跡出土遺物
	第69号溝跡出土遺物		古銭
図版78	第74号溝跡出土遺物	図版96	鉄製品
	第76号溝跡出土遺物		貝塚穴痕泥岩
	第87号溝跡出土遺物	図版97	第69号井戸跡出土木製品
	第123号溝跡出土遺物		第70号井戸跡出土木製品
図版79	第123号溝跡出土遺物		第77号井戸跡出土木製品
	第1号性格不明遺構出土遺物		第80号井戸跡出土木製品
図版80	第1号性格不明遺構出土遺物		第1号溝跡出土木製品
図版81	第1号性格不明遺構出土遺物	図版98	第1号溝跡出土木製品
	第2号性格不明遺構出土遺物		第3号性格不明遺構出土遺物
図版82	第2号性格不明遺構出土遺物		第4号性格不明遺構出土遺物
	第3号性格不明遺構出土遺物	図版99	第27号井戸跡出土遺物
図版83	第3号性格不明遺構出土遺物		第39号井戸跡出土遺物
図版84	第3号性格不明遺構出土遺物		第44号井戸跡出土遺物
図版85	第3号性格不明遺構出土遺物		第41号井戸跡出土遺物
図版86	第3号性格不明遺構出土遺物	図版100	第45号井戸跡出土遺物
	グリッド出土遺物		第49号井戸跡出土遺物
図版87	グリッド出土遺物		第69号井戸跡出土遺物
図版88	グリッド出土遺物	図版101	第3号性格不明遺構出土遺物 漆椀
図版89	グリッド出土遺物	図版102	第30号井戸跡出土木製品
図版90	グリッド出土遺物		第41号井戸跡出土木製品
図版91	肥前系の陶器		第69号井戸跡出土木製品

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成19年度からの新5か年計画「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」に「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」という基本目標を掲げている。こうした中で、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る埋蔵文化財の保護について、昭和62年度の間関・狭山・日高地区を皮切りに現在まで国土交通省などの関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される元宿遺跡(37-021)は平成13年度に国土交通省関東地方整備局大宮工事事務所から「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会がなされた。その後、平成16年度末に当課が実施した試掘調査によって、古墳時代の住居跡等、道路建設工事に先立ち、記録保存の発掘調査を実施すべき遺構が存在していることが確認された。

このため、発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたる

こととし、事業団、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、文化財保護課(当時)の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、発掘調査が次のとおり実施された。

平成17年8月1日～平成18年3月24日

平成18年4月10日～平成18年4月28日

文化財保護法第57条の3(当時)の規定による埋蔵文化財発掘通知は国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長から平成17年3月30日付け大国土第187号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は埼玉県教育委員会教育長から平成17年3月31日付け教文第3-1062号で行われた。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から地元元川島町教育委員会経由で埼玉県教育委員会教育長あて提出された。これに対する県教育委員会としての発掘調査の指示は次の文書で行った。

平成17年8月9日付け教文第2-46号

平成18年4月26日付け教文第2-5号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

元宿遺跡の発掘調査は、平成17・18年度に実施した。調査対象面積は、7,700㎡である。

平成17年度を第1次、平成18年度を第2次として調査を実施した。

平成17年度（元宿第1次）

元宿遺跡第1次の発掘調査は、平成17年8月1日から開始した。調査面積は、6,700㎡を対象に行った。

調査地点は、現道によって3つに分断されていたため、便宜的にA～Cと命名し調査を行った。

平成17年8月中に事務手続き、事務所設置作業を行い、重機による表土除去作業を開始した。

8月上旬、人力で遺構確認を行い、A・C区から調査を実施した。9月初旬と10月中旬に基準点測量を実施した。

調査の進展に伴い順次、土層断面図、平面図等の作成、遺物の取り上げ、および写真撮影を行った。

平成18年3月に、遺構の分布状況を把握するため、空中写真撮影を実施した。

3月下旬、調査が終了したA区の、重機による埋め戻しを行った。

事務処理等を含め、すべての作業を3月24日に終了した。

平成18年度（元宿第2次）

元宿遺跡第2次の発掘調査は、平成18年4月10日から開始した。調査面積は、1,000㎡を対象に行った。

B区とC区の残り部分の遺構確認を行い、順次、土層断面図、平面図等の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を行った。

平成18年4月下旬、遺構の分布状況を把握するため、B・C区の空中写真撮影を実施した。

同じく4月下旬、調査が終了したB・C区の、重機による埋め戻しを行った。

事務処理、事務所撤去等を含め、すべての作業を4月28日に終了した。

(2) 整理報告書の作成

元宿遺跡の整理・報告書作成事業は、平成20・21年度に実施した。以下、年度ごとの整理・報告書作成の経過を述べる。

なお、遺物の整理にあたって、コンテナ総数81箱の内、平成20年度に54箱、平成21年度に27箱を対象に実施した。但し、水洗・注記は、平成20年度に全箱行い、平成21年度は27箱分の接合・復元から開始した。

平成20年度

平成20年度の整理・報告書作成は、平成20年5月1日から平成21年3月24日まで実施した。

5月当初から、遺物の水洗・注記作業と、同時に遺構断面の修正・第二原図の作成を行った。続いてコンテナ54箱分の遺物の接合・復元作業を行った。

7月からグラフィックソフトによる遺構図のデジタルトレースを開始した。続いて、遺構分布図、全体図の作成、遺構のデータ処理など行い3月末まで実施した。

同じく7月から遺物の復元作業と並行しながら、遺物の実測・拓本・トレース作業を開始し、3月末まで実施した。

9月から遺物実測図のトレースを開始し、3月末まで実施した。

12月から、トレースの終了した遺物実測図を用いて遺物図版の作成を開始し、3月末まで実施した。

報告書の刊行は、平成21年度に行うため、平成20年度は遺構・遺物の整理のみで、遺構図版の版

組みや遺物の写真撮影等は実施しなかった。

平成21年度

平成21年度の整理・報告書作成は、平成21年4月8日から平成21年9月30日まで実施した。

4月当初から5月中旬にかけて、残りのコンテナ27箱分の遺物の接合・復元作業を行った。

これと並行して遺構図面の修正・第二原図の作成、グラフィックソフトによる遺構図のデジタルトレース、および遺物の実測・拓本を実施した。

また同時に、平成20年度に作成した遺構図や遺物実測図の版組みを開始した。

5月中旬から6月末にかけて遺物実測図のトレースを行った。

6月末から7月上旬にかけて、遺物の写真撮影を行い、遺物写真図版編集作業を開始した。

その後、報告書の割り付けと原稿執筆を9月末にかけて行った。

9月、作業が終了した段階で、遺構図面類・出土遺物を分類・整理し、収納作業を行った。

9月下旬に、入札により印刷会社を決定し、入稿した。

その後、3回の校正を経て、11月下旬に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成17年度（発掘調査）

理 事 長	福田 陽 充
常務理事兼管理部長	保 永 清 光
管理部	
管理部 副部長	村 田 健 二
主 席	高 橋 義 和

調査部

調 査 部 長	今 泉 泰 之
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
主席調査員(調査第二担当)	鯛 持 和 夫
統 括 調 査 員	鈴 木 孝 之
統 括 調 査 員	新 屋 雅 明
統 括 調 査 員	上 野 真由美
主任 調 査 員	福 田 聖
調 査 員	松 本 美佐子
調 査 員	村 端 和 樹

平成18年度（発掘調査）

理 事 長	福田 陽 充
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一
総務部	
総務部 副部長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	高 橋 義 和

調査部

調 査 部 長	今 泉 泰 之
調 査 監	坂 野 和 信
調 査 部 副 部 長	小 野 美代子
主幹兼調査第一課長	金 子 直 行
主 査	黒 坂 禎 二

平成20年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総務課長	松 盛 孝	主 査	鈴 木 孝 之

平成21年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総務課長	田 中 雅 人	主 査	鈴 木 孝 之

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

元宿遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字三保谷字元宿に所在し、川島町役場の東約1.7kmに位置している。

川島町は、埼玉県のほぼ中央部の荒川低地にあり、隣接する市町村とは河川によって画されている。

町域は、北は市野川により吉見町と、東は荒川により上尾市・桶川市と、南は入間川により川越市と、西は越辺川・都幾川により坂戸市・東松山市というように、河川によって町域が明確に画されている。

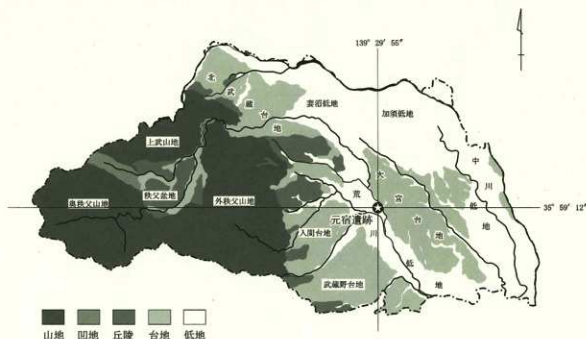
川島町域では、大小の河川は概ね北西方向から南東方向に向かって流下している。町域の西、東松山市高坂付近では、越辺川と都幾川が合流し、さらに下流の川越市との境界付近では入間川と合流する。そしてこの入間川は、上尾市・さいたま

市との境界付近で荒川に合流する。町域の北では市野川が東流して、北本市・桶川市付近で荒川に合流している。

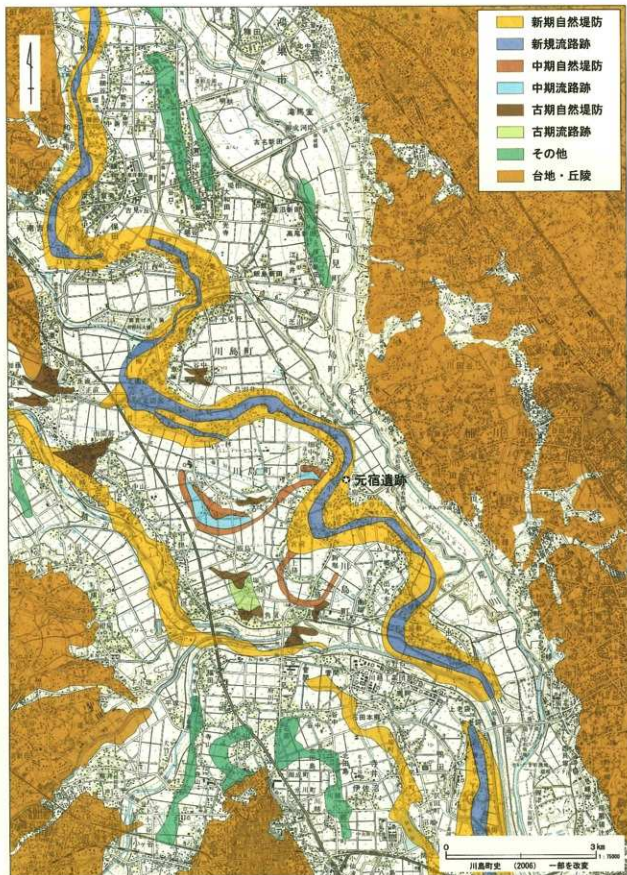
川島町は、大小の河川によって形成された自然堤防・後背湿地、そして旧流路跡という地形要素から成るが、この三要素は河川の蛇行がきわめて顕著に残されていることで知られる地域でもある。

現在の土地利用は、自然堤防上は宅地や畑地、後背湿地や流路跡の多くは水田域となっているが、現在低地となっている場所であっても、自然堤防が埋没している可能性は否定できない。

川島町の自然堤防については、その切り合い関係から、古期・中期・新期の三期に分類されている(川島町2006)。古期の自然堤防は、断片的ながら並行関係にある飯島と安塚の自然堤防で、その間が旧流路跡とされる。中期では、平沼に認め



第1図 埼玉県の地形



第2図 遺跡周辺の地形

られる並行する二筋の自然堤防であり、その間が旧流路とされる。この中期流路跡の左岸の自然堤防上には平沼一丁田遺跡(岡田2009)、右岸の自然堤防上には白井沼遺跡(栗岡2007)が立地している。両遺跡ともに、縄文時代中期の遺構と遺物が検出されており、両自然堤防は縄文時代中期には形成されていたといえる。ちなみに、この中期自然堤防は、新規自然堤防によって分断されている。中期の自然堤防については、宮前から上猪下猪にかけて、明瞭な半円形を呈した自然堤防が存在するが、これと並行する自然堤防は認められず、旧流路の痕跡は失われている。新时期では、下小見野から出丸本郷にかけて存在する。並行する二筋の自然堤防が相当し、その間が旧流路とされる。元宿遺跡は、現在まで明瞭に残るこの自然堤防の左岸側に位置している。なお、この他に越辺川沿いにも新时期自然堤防が認められる。

町内の芝沼堤外遺跡(金子2004)や東野遺跡(岡田2009)は、荒川右岸の河川敷に立地する遺跡である。ともに、現地表面下5m程の位置から、縄文時代前期の遺構や遺物が検出されている。しかし両遺跡とも、現地形からは遺跡がのっていたであろう自然堤防を窺い知ることはできない。このことから、ほかにも埋没している自然堤防が存在する可能性が考えられる。

2. 歴史的環境

川島町内における発掘調査例は少ないが、川島町史編纂事業や近年の首都圏中央連絡自動車道の新設事業などによって、徐々に過去の姿が浮かび上がりがつつある。

縄文時代

元宿遺跡の所在する、荒川中流域の荒川低地には旧石器の遺跡はないとされている。現時点で、川島町内で知られる最も古い遺跡は、前期の土器が出土した、記述の芝沼堤外遺跡(78)と東野遺跡(81)である。ついで白井沼遺跡(3)では、

縄文時代中期中葉と後期初頭の土器が、平沼一丁田遺跡(4)では集石土壌に伴って中期の土器片が出土した。

弥生時代

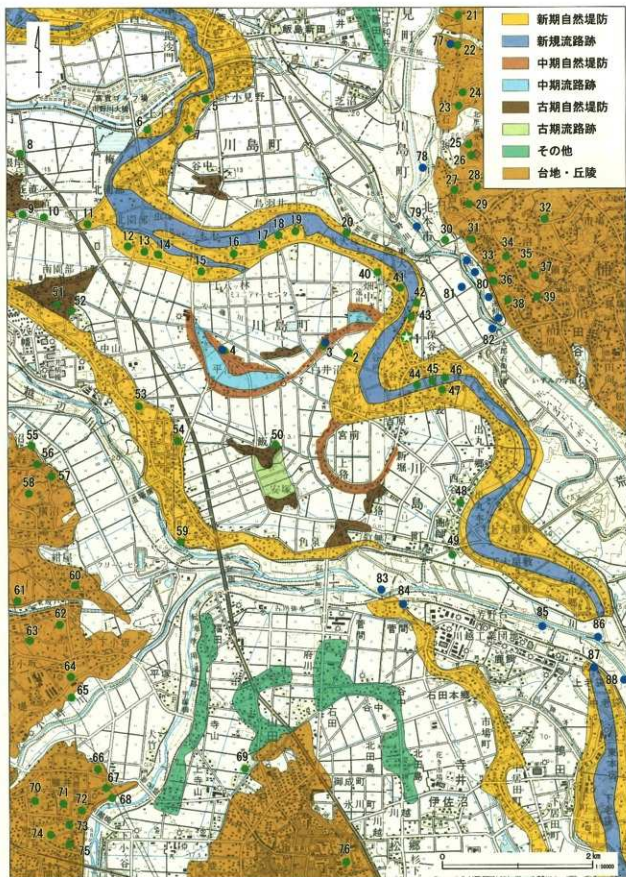
弥生時代の遺跡は、町内では村並遺跡(40)で中期の条痕文系土器が出土しているが、集落の有無は確認されていない。村並遺跡と同じ新期の自然堤防上に立地する元宿遺跡でも、今回の発掘調査で中期の土器が出土している。今後調査例が増せば、ほかにもこの時期の遺跡が検出される可能性がある。

町外に目を転じれば、東松山市代正寺・大西遺跡、坂戸市附高遺跡・木曾免遺跡(57)で弥生時代中期の集落が検出されている。多くは台地上に立地しているが、東松山市反町遺跡は、低地における自然堤防上に立地する中期の集落が確認された。埼玉県北部では、熊谷市北鳥遺跡およびその周辺地域でも、自然堤防上に中期の集落が確認されている。

弥生時代後期の遺跡は、坂戸台地・高坂台地・東松山台地・大宮台地などの台地上に立地している。なお、当地域は、高坂台地・東松山台地を中心として、後期の吉ヶ谷式土器が盛んに用いられた地域でもある。しかし現在までのところ、川島町内の自然堤防上では、後期の遺跡は確認されていない。

古墳時代

続いて、川島町域に遺跡が登場し始めるのは、古墳時代前期である。近年、首都圏中央連絡自動車道をはじめとした開発事業に伴う発掘調査によって、川島町域内の自然堤防上でも古墳時代前期の遺跡が検出されている。川島町内で最も新しいといわれる自然堤防上に、北から安楽寺遺跡(6)・宮ヶ谷戸遺跡(17)・柳町遺跡(18・19)・村並遺跡・尾崎遺跡(41)・富田後遺跡(2)・元宿遺跡(1)・西谷遺跡(48)等の遺跡が確認されている。



第3図 周辺の遺跡（縄文・古墳）

元宿遺跡・富田後遺跡が立地する自然堤防に切られる形で残存する細長い弧状を描く自然堤防上には白井沼遺跡が立地する。また、この自然堤防とは旧流路を挟んだ、対岸に位置する自然堤防上には平沼一丁田遺跡が立地している。

同じく町内の越辺川に面した自然堤防上には堂地遺跡(53)がある。このほか、玉造りの工程途中の遺物が数多く出土した正直玉作遺跡(10)がある。

川島町内では、元宿遺跡を含む自然堤防上の集落跡で、周溝状遺構と呼ばれる遺構が検出されている。周溝状遺構は、従来、方形周溝墓とされていた遺構である。これは、竪穴住居跡や建物跡の周囲に溝を巡らせる遺構を指す用語であり、尾崎遺跡・白井沼遺跡・平沼一丁田・富田後遺跡などでも確認されている。

また、川島町の北隣の吉見町では、元宿遺跡・富田後遺跡が接するのと同じ旧流路に面した自然堤防上に、三ノ耕地遺跡がある。この遺跡では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓2基が検出され、東海系の土器が多数出土した。

三ノ耕地遺跡に近接する吉見丘陵上には、前方後方墳である山の根古墳が存在する。台地上の遺跡では、東松山市内の東松山台地上に、古墳時代前期の土器型式の標式遺跡となっている五領遺跡や番清水遺跡が存在する。また、両遺跡と同じ台地の突端部付近には、下道添遺跡が立地している。

都幾川を挟んだ対岸の高坂台地には、諏訪山遺跡・高坂三番町遺跡が、台地下の自然堤防上には反町遺跡が存在する。

川島町内では、古墳時代中期の遺構・遺物は確認されていない。

後期になると、新时期自然堤防上に廣徳寺古墳(45)・大塚古墳(20)などがあるほか、富田後遺

跡では古墳跡が検出されている。

後期の集落跡としては、村並遺跡・尾崎遺跡・富田後遺跡・元宿遺跡などがある。

奈良・平安時代

川島町内におけるこの時期の遺跡の調査例は少ないが、奈良・平安時代の遺跡として、正直稲荷町遺跡(8)・尾崎遺跡・村並遺跡・元宿遺跡・堂地遺跡・西見寺遺跡(14)・極楽寺遺跡(15)などがあげられる。

中・近世

文献資料から、川島町域には三尾谷(三保谷)・戸守(戸森)・小見野(尾美野)・八林・井草・土袋などの郷があったことが知られている。それらの大半は現存しているが、各々いつ頃成立したのかは、資料も少なく不明な点も多い。

町内の中世遺跡として、平沼一丁田遺跡・廣徳寺古墳・廣徳寺遺跡(46)・宮ヶ谷戸遺跡・尾崎遺跡・極楽寺遺跡・吹塚古墳(12)・正直稲荷町遺跡・上伊草堀ノ内遺跡(54)・華藏院地藏堂遺跡(13)・東福院遺跡(59)・堂地遺跡・富田後遺跡、そして元宿遺跡を含め14遺跡がある。これらは、いずれも自然堤防上に立地している。遺跡や板碑の分布状況から、すべての自然堤防に及んでいることがわかる。

このことから、自然堤防上はすべて中近世の遺跡が展開しているとも考えられる。現在確認されている中・近世遺跡は14箇所であるが、このうち、発掘調査が行われたのは、平沼一丁田遺跡・堂地遺跡・白井沼遺跡・富田後遺跡・元宿遺跡の5遺跡である。しかし、発掘調査事例が増せば、この時期の遺跡もさらに増加すると推測される。

なお、『平家物語』に登場する三尾谷十郎広徳は、元宿遺跡の所在する三保谷(三尾谷)郷を名字とするという。

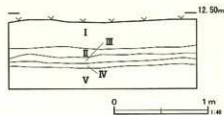
第1表 周辺の遺跡一覧

市町村	番号	遺跡名	時代	市町村	番号	遺跡名	時代
川島町	1	元宿遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良・平安 中・近世	川島町	47	慶徳寺古墳	古墳
川島町	2	富田後遺跡	縄文 古墳 奈良・平安 中・近世	川島町	48	西谷遺跡	古墳
川島町	3	白井沼遺跡	縄文 古墳	川島町	49	浅間塚古墳	古墳
川島町	4	平沼一丁田遺跡	縄文 古墳 中・近世	川島町	50	森谷稲荷古墳	古墳
川島町	5	宮ノ町遺跡	奈良・平安	川島町	51	上麻天神社遺跡	奈良・平安
川島町	6	安楽寺遺跡	古墳 奈良・平安	川島町	52	中麻正皇寺遺跡	奈良・平安
川島町	7	稲荷塚遺跡	古墳	川島町	53	堂地遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	8	正直藤荷町遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世	川島町	54	上伊草塚ノ内溝跡	奈良・平安 中・近世
川島町	9	山ノ塚古墳	古墳	坂戸市	55	牛塚山古墳群	古墳
川島町	10	正直玉作遺跡	古墳	坂戸市	56	小沼堀之内遺跡	古墳
川島町	11	塚ノ腰古墳	古墳	坂戸市	57	木曾免遺跡	旧石器 弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	12	吹塚古墳	古墳 奈良・平安 中・近世	川島町	58	北谷遺跡	縄文 古墳 中・近世
川島町	13	華藏院地蔵堂遺跡	古墳 中・近世	川島町	59	東福院遺跡	中・近世
川島町	14	西見寺遺跡	奈良・平安	坂戸市	60	高窪遺跡	古墳
川島町	15	梅堂寺遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世	坂戸市	61	景台遺跡	縄文 中・近世
川島町	16	上八ッ林古墳	古墳	坂戸市	62	天王山古墳群	古墳
川島町	17	宮ノ谷戸遺跡	古墳 中・近世	坂戸市	63	上谷遺跡	古墳
川島町	18	柳町遺跡A区	古墳	坂戸市	64	下小坂古墳群	奈良・平安
川島町	19	柳町遺跡B区	古墳 奈良・平安	川越市	65	登戸遺跡	縄文 弥生 古墳 中・近世 弥生 古墳 奈良・平安
川島町	20	大塚古墳	古墳	川越市	66	余下遺跡	中・近世
北本市	21	宮岡遺跡	古墳 奈良・平安	川越市	67	花見堂遺跡	弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
北本市	22	雷電遺跡	縄文 古墳 中・近世	川越市	68	浅間下遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
北本市	23	間原遺跡	古墳	川越市	69	南山田遺跡	弥生 古墳
北本市	24	市場I遺跡	縄文 奈良・平安 中・近世	川越市	70	日柱神社遺跡	古墳 中・近世
北本市	25	諏訪山北遺跡	古墳	川越市	71	龍光遺跡	奈良・平安 中・近世
北本市	26	轟山南遺跡	古墳 古墳 奈良・平安	川越市	72	河越館跡	奈良・平安 中・近世
北本市	27	下宿遺跡	古墳 中・近世	川越市	73	天子遺跡	奈良・平安 中・近世
北本市	28	元宿敷遺跡	縄文 古墳 奈良・平安	川越市	74	山土久保遺跡	奈良・平安 中・近世
北本市	29	所塚遺跡	古墳 中・近世	川越市	75	霞ノ関遺跡	弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
福川市	30	東台I遺跡	古墳	川越市	76	川越城遺跡	中・近世
福川市	31	台原遺跡	弥生 古墳	川越市	77	宮岡II遺跡	縄文
福川市	32	大平遺跡	旧石器 縄文 古墳 中・近世	川島町	78	茅沼原外遺跡	縄文
福川市	33	西谷遺跡	縄文 古墳	川島町	79	荒川河床市野川合流 地点遺跡	縄文
福川市	34	前原遺跡	縄文 古墳 中・近世	福川市	80	荒川河床内遺跡	縄文
福川市	35	中台II遺跡	古墳	川島町	81	東野遺跡	縄文
福川市	36	川田谷古墳群	古墳	川島町	82	荒川河床太郎右衛門 橋付近遺跡	縄文
福川市	37	木久保I遺跡	弥生	川島町	83	入間川河床遺跡A地点	縄文
福川市	38	若宮台遺跡	古墳	川越市	84	入間川河床遺跡B地点	縄文
福川市	39	三ツ木遺跡	弥生 古墳 中・近世	川島町	85	入間川河床遺跡D地点	縄文
川島町	40	村並遺跡	弥生 古墳 奈良・平安	川島町	86	入間川河床遺跡G地点	縄文
川島町	41	尾崎遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世	川越市	87	入間川東河床遺跡	縄文
川島町	42	富士次間塚古墳	古墳	川越市	88	上巻遺跡	縄文
川島町	43	堂宮塚古墳	古墳				
川島町	44	養竹院内古墳	古墳				
川島町	45	廣徳寺古墳	古墳 中・近世				
川島町	46	廣徳寺遺跡	中・近世				

基本土層

I層は畑地としての灰褐色の耕作土で、微量ではあるが浅間A軽石が混入する。II層以下は自然堤防としての自然堆積層である。III層は暗褐色の遺物包含層で、IV層以下が地山となる。IV層上面を遺構確認面とした。

肉眼観察のレベルでは、浅間B軽石やF Aなどの火山灰は確認されなかった。



- I 耕作土
- II 灰褐色土
ローン範囲の地山ブロック(2~3m)やや多
耕作により部分的に攪乱された土層
- III 暗褐色土
地山ブロック(1~2m)・カーボン少
遺物包含層
- IV 暗褐色土
ローン範囲の黄褐色土ブロックやや多
しまり強・粘性强 地山
- V 暗褐色土
黄褐色土ブロック多 しまり強・粘性强 地山

※ A区はB・C区より地盤が低いため、宅地造成時にこの土層の上は60~100cm程、客土されている

第4図 基本土層図

III 遺跡の概要

元宿遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字三保谷字元宿326-6番地他に所在し、川島町役場の東約1.7kmに位置している。調査は一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴うもので、平成17年8月1日から平成18年4月28日まで9か月間実施された。

遺跡は、川島町中央よりやや東寄りを北西から南東へと流下した河川によって形成された新时期自然堤防上に立地している(第2図)。この旧流路は蛇行が激しく、幅の大小に違いがあるものの、兩岸にはほぼ途切れることなく自然堤防が続いている。元宿遺跡は、この旧流路が東から西へほぼ直角に流れ下った地点の左岸に位置している。遺跡付近の標高は13m前後で、旧流路との比高差は1m程である。この旧流路の対岸、750m西には富田後遺跡が所在する。さらに、富田後遺跡の立地する自然堤防に切られる中期自然堤防上には白井沼遺跡(元宿遺跡の西方約1km)が所在し、白井沼遺跡の対岸に位置する自然堤防上には、平沼一丁田遺跡(元宿遺跡の西方約2.3km)が所在している。この白井沼遺跡と平沼一丁田遺跡では、縄文時代中期の土器が出土しており、この時期には自然堤防が形成されていたことがわかる。元宿遺跡では縄文時代後期の土器が、そして富田後遺跡でも縄文時代後期の土器が検出されており、自然堤防の形成がこの時期にまで遡ることがわかる。

元宿遺跡の推定範囲は、南北約250m、東西約100mである。今回の発掘調査はそのほぼ中央部を南西から北東にかけて、幅3~46m、延長約280m、面積7,700㎡の発掘調査を行った。遺跡の立地する自然堤防は、微地形的に西側(C区)が高く、北(旧流路)に向かって比較的急な落ち込みをみせるが、東(A区)に向かっては緩やかな傾斜で降下していると推定される。両地点の最大比高差は50cm程である。

調査の結果検出された遺構は、住居跡18軒、掘立柱建物跡49棟、柵列跡3基、方形周溝墓6基、周溝状遺構11基、井戸跡90基、土壇286基、溝跡152条、性格不明遺構6基、畝状遺構1条のほか、ビッド多数である。

古墳時代前期の遺構としては、方形周溝墓周溝と、建物跡とされる周溝状遺構が主なものであるが、前者は自然堤防上の高い部分に、後者は低い部分に位置している。

6基の方形周溝墓のうち、全体が調査区内に存在していたのは1基のみであり、それ以外はいずれも「コ」の字状もしくは「ク」の字状に調査を行う結果となった。その中で第6号方形周溝墓については、遺構確認作業の段階で、溝内埋葬の可能性が指摘されている溝内土壌が確認された。そこで、位置を変えて複数の土壌サンプルを採取し、リン・カルシウム分析を委託した。その結果、骨・歯に由来するリン・カルシウムが、土壇底面付近に分布していたことが確認された。

古墳時代後期や古代のほか、遺物が出土していないため時期の特定できないものも含め、住居跡はいずれも、自然堤防上の高い部分(C区)でのみ分布している。

掘立柱建物跡は、調査区西端部を除いてほぼ全域に分布している。主軸方位にいくつかのパターンがあることから、時期差があると考えられる。他遺構との重複関係から、古墳時代や古代さらに中・近世の掘立柱建物跡が存在すると推定される。

これらの点から、縄文時代については明言できないが、古墳時代から中・近世に至る集落遺跡であったと考えられる。

遺跡名の由来となった字名「元宿」や、大字名「三保谷宿」という地名と、今回の調査で検出された遺構や遺物との関連性については明らかではない。

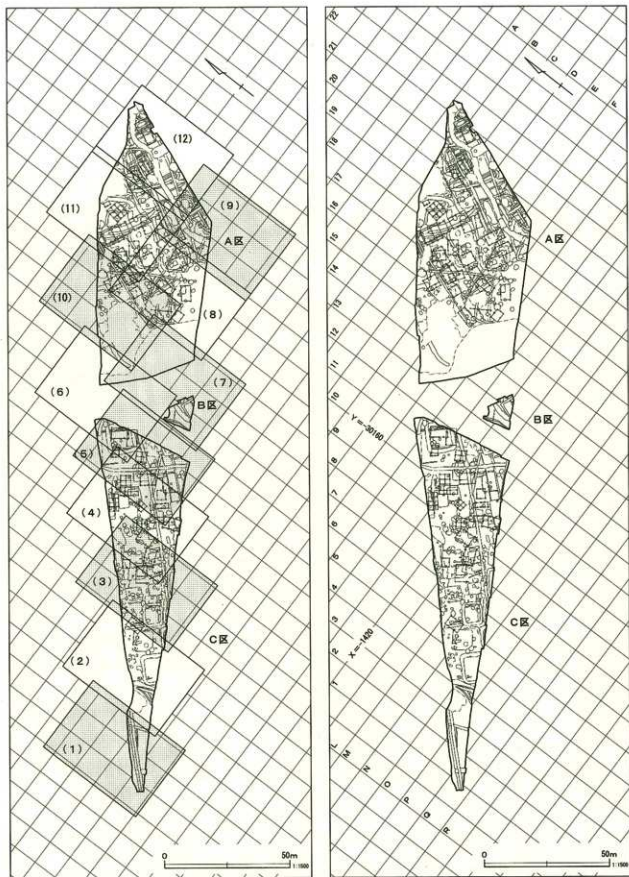
迅速測図（上尾・川越・鴻巣・熊谷）



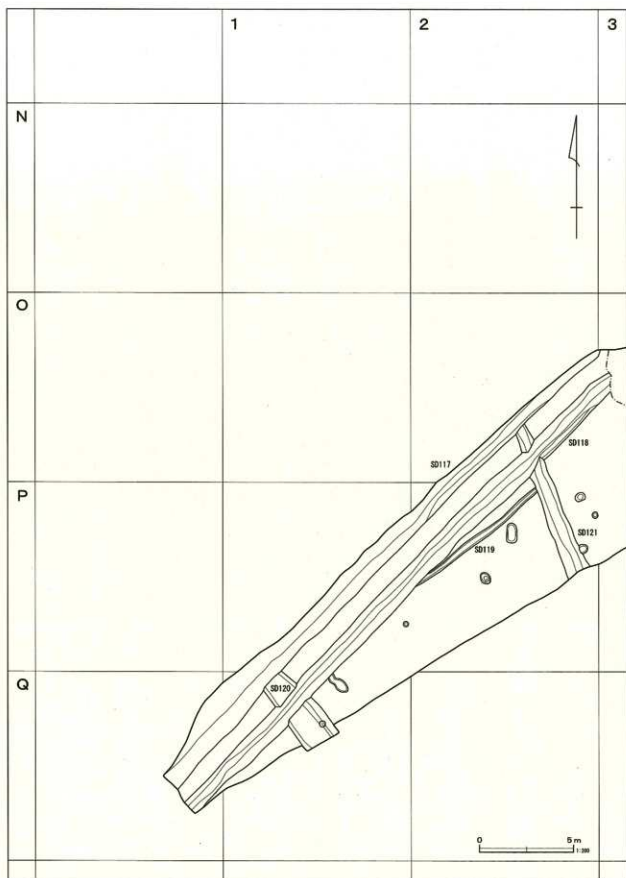
地形図（上尾・川越・鴻巣・熊谷）



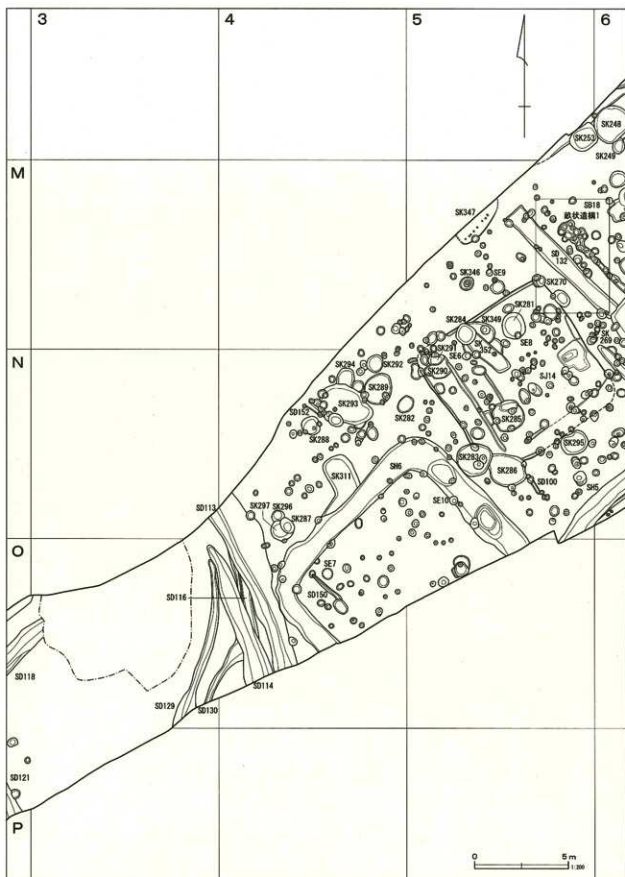
第5図 遺跡の位置



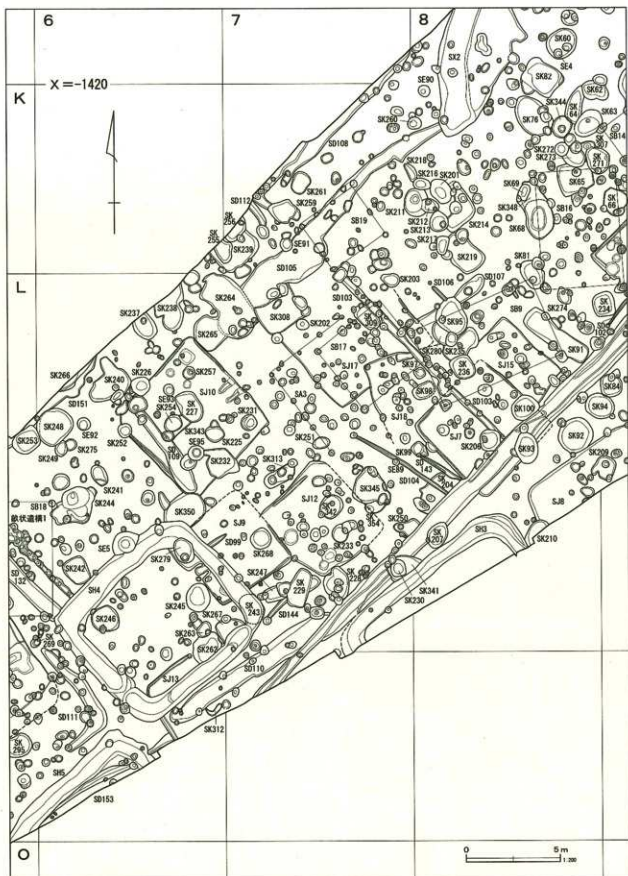
第6图 遗址全体区划图1/1500



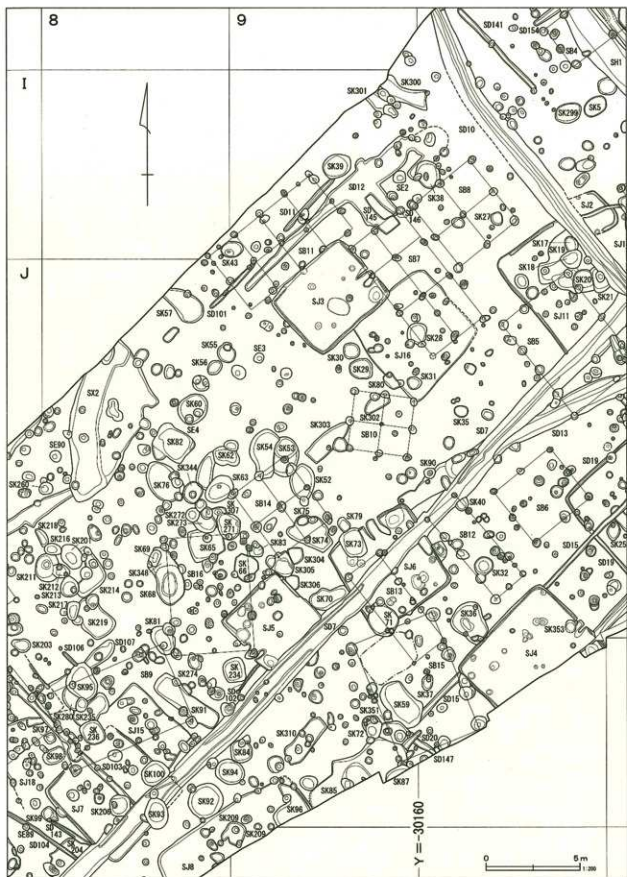
第7图 区划图 (1)



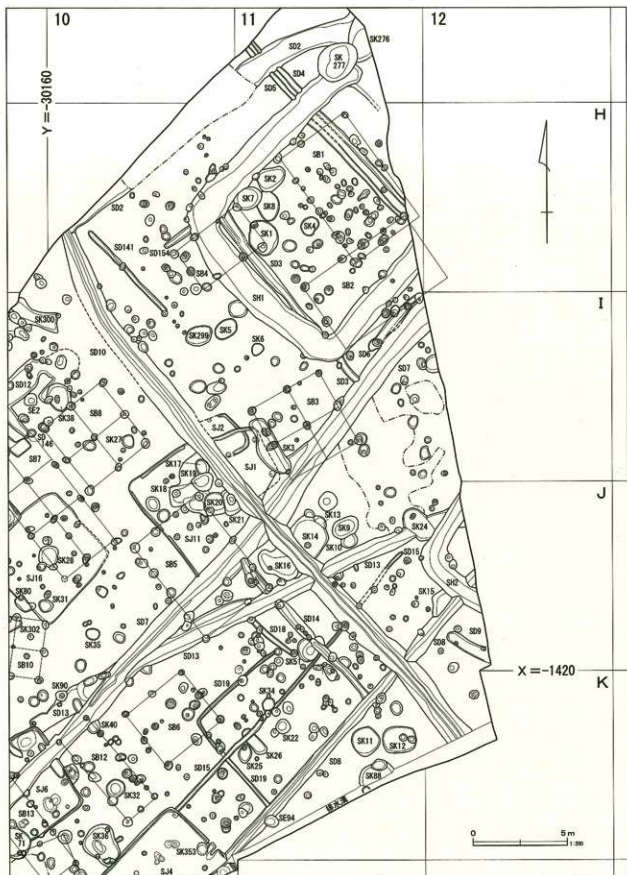
第8图 区划图(2)



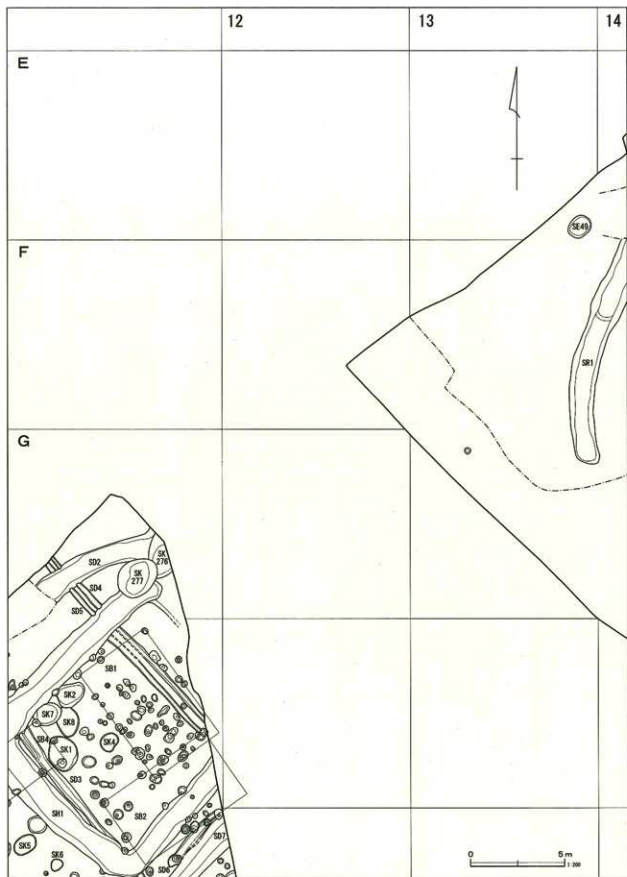
第9区 区割图 (3)



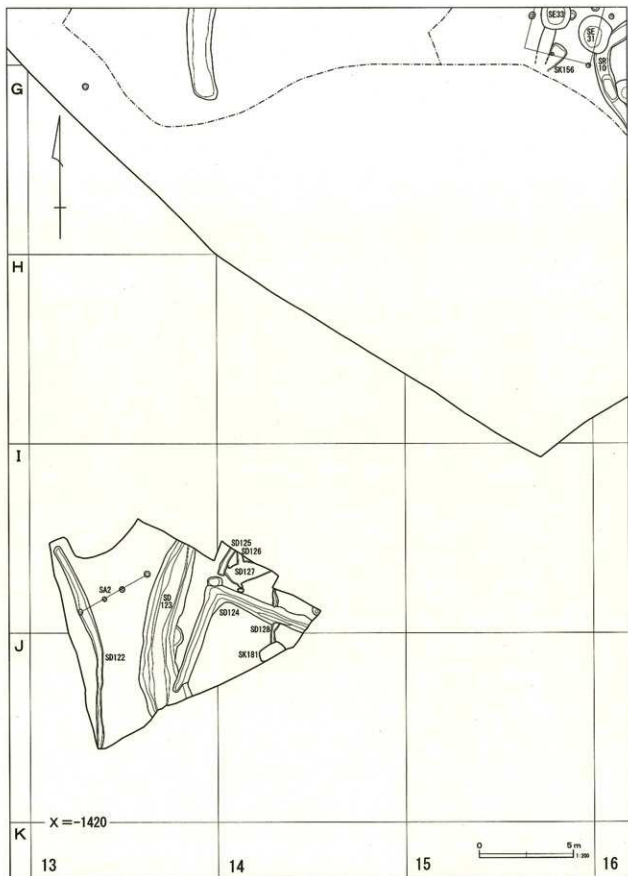
第10图 区划图(4)



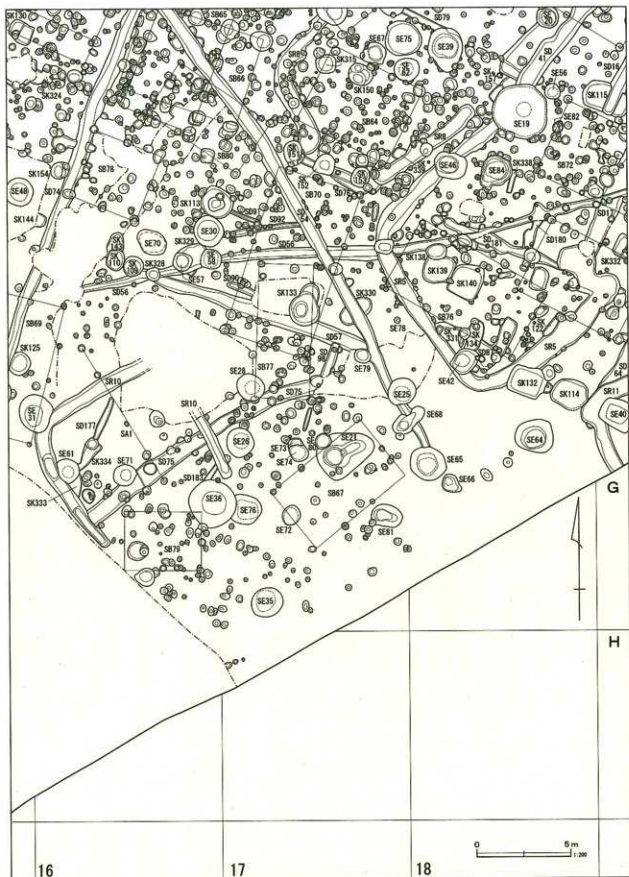
第11图 区划图 (5)



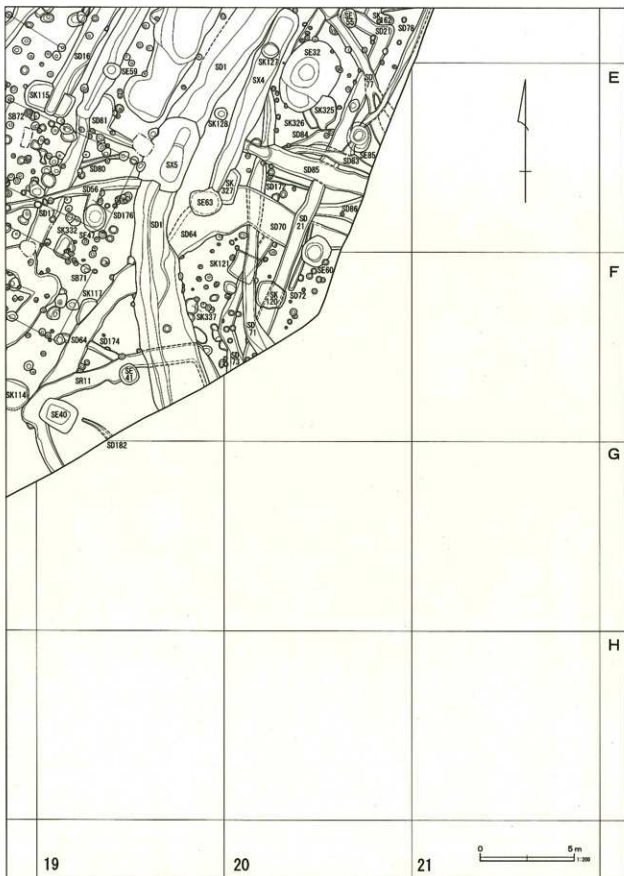
第12图 区划图(6)



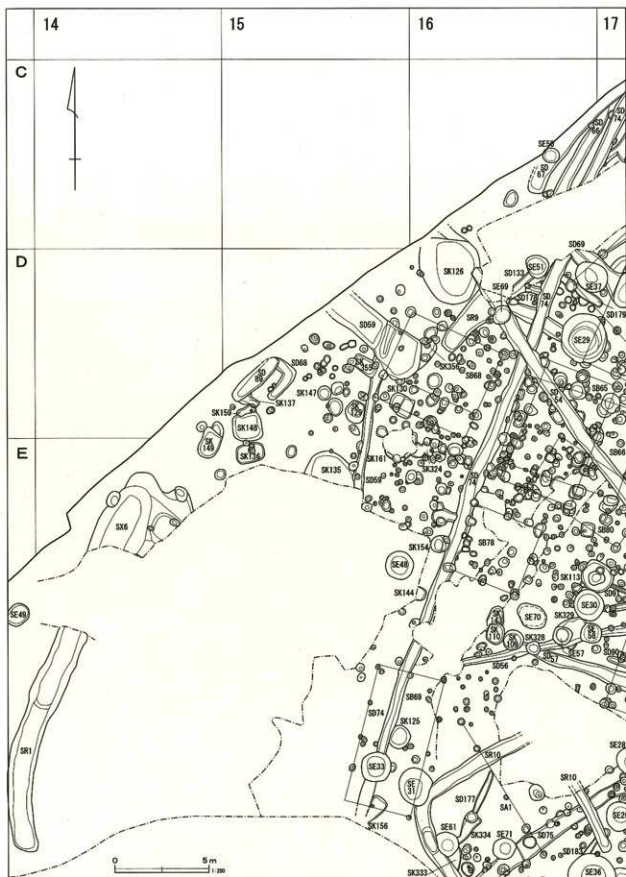
第13区 区劃圖 (7)



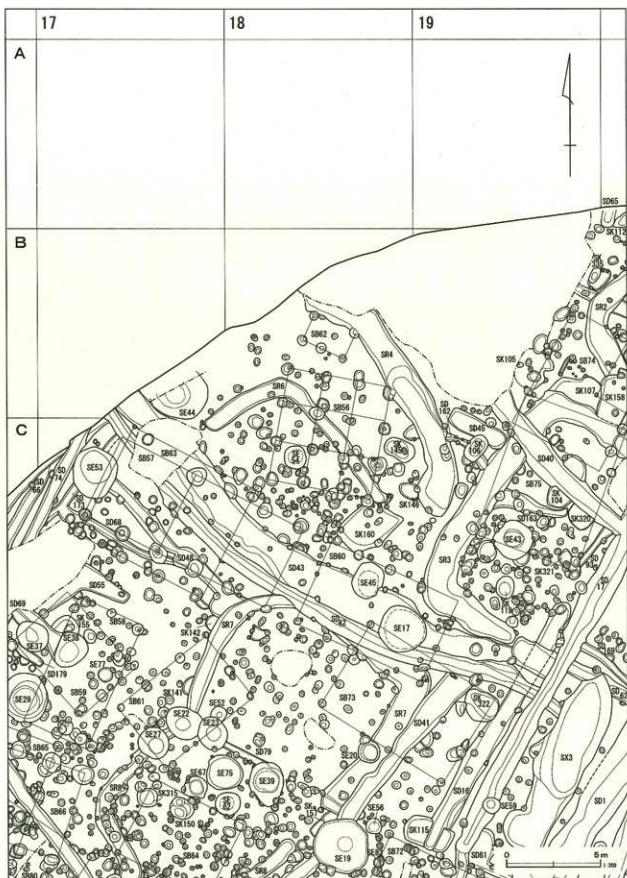
第14图 区划图 (8)



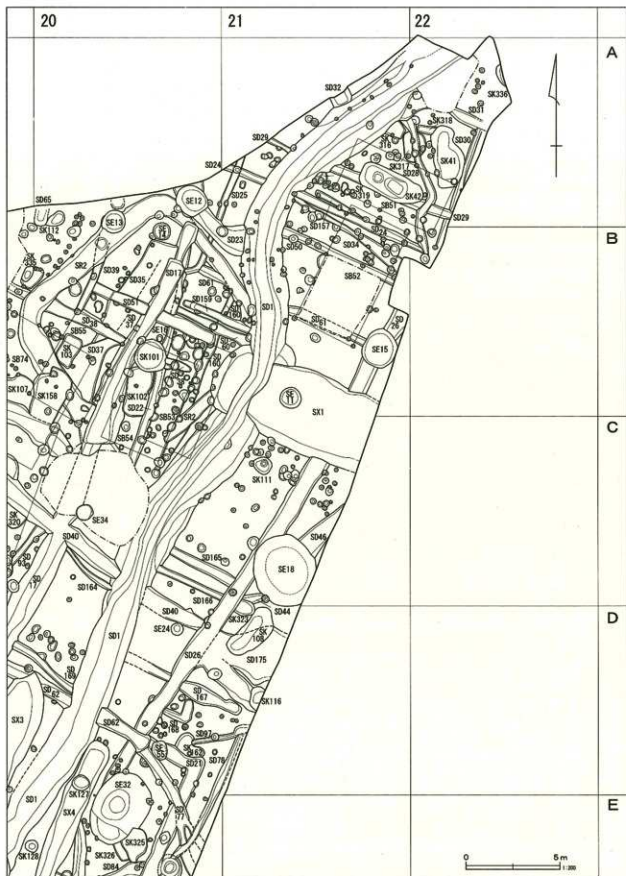
第15图 区劃图 (9)



第16图 区划图 (10)



第17图 区割图 (11)



第18图 区划图 (12)

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

調査区内から、数は少ないが縄文時代の遺物が検出されている。また、遺構については第284号土壌が1基検出されたのみであったが、縄文時代以降の遺構や、削平などによって失われた遺構が他にも存在していた可能性が考えられる。

第284号土壌 (第19図)

M・N-5グリッドに位置する。第349・352号土壌と重複している。土壌の残存部分の平面形は、円形に近いものである。残存する長径1.15m、短径1.00m、深さ0.28mである。

遺物は、第19図1の深鉢形土器が検出された。土壌内からは複数の土器片が検出されたが、同一個体と考えられることから、1が単独で埋設されていたと考えられる。

他の土壌の重複や削平などにより、土壌の大部分が失われたと考えられるため、1は全体の半分程度が検出されたのみであった。残存している破片から復元された土器の、推定される口径23cm、底径9cmである。

器形は、口縁部が直線的に外側に開くもので、胴上部はゆるやかに括れ、胴下部で外側に張り出し底部に至るものである。

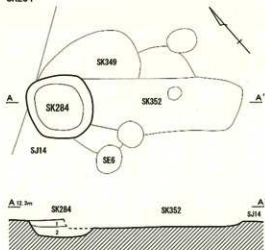
口縁部は幅の狭い無文帯となっており、口縁部下と、胴下部の張り出し部分には沈線を巡らして区画しており、その間を文様帯として磨り消し縄文を施文している。張り出し部から底部までは無文となっている。胴下部の無文部は、器面が剥落しているため明瞭ではないが、縦方向に磨きなどの調整を施している。

文様帯内は、縦方向に沈線を施文して器面を方形形状に分割し、その区画内に三角形のモチーフを施文している。区画内の三角形の文様は2重に施文され、入れ子状に向きを変えて3段配置されている。地文は文様の形状に合わせて、帯状に単節LRの縄文を充填して施文している。

口縁の内側には、口唇部直下に沈線を一本巡らしている。

土壌の時期は出土した土器から、後期前葉の堀之内2式期であると考えられる。

SK284

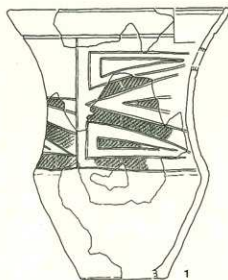


S SK284

1 暗褐色土 地山ブロック(0.5~1.0cm)少 粘土ブロック(1.0cm)微量 しまり強

粘性やや弱

2 暗黄褐色土 地山ブロック(2.0~3.0cm)極多 地山粒多 しまり強 粘性やや弱



第19図 第284号土壌・出土遺物

グリッド出土土器 (第20図)

1~36はグリッド出土土器である。いずれも縄文時代後期の土器である。

第I群土器 (第20図1~11)

後期前葉の土器群を一括する。

1~6は、縄文など地文を施文しない、無地文の深鉢形土器の胴部の破片である。1は、比較的大い沈線で文様を施文するものである。2~6は1と比較し、細い沈線で胴部に文様を施文するものである。沈線は多条化し、直線的に垂下する沈線や斜行する沈線が施文されている。1は堀之内1式土器、2~6は堀之内1から2式土器である。

7~11は縄文のみを施文する深鉢形土器の破片である。7は口縁部で、8~11は胴部の破片である。7~10は、地文として単節RLの縄文を施文している。11は粗い原体で地文を施文する。7~11は、堀之内1~2式土器と考えられる。

第II群土器 (第20図12~32)

後期中葉から後葉の土器群を一括する。

12~17は後期中葉の加曾利B式土器である。12は深鉢形土器の口縁部の破片で、口縁部には単節LRの縄文を帯状に施文している。13~16は、3単位の突起を持つ深鉢形土器の突起部分の破片である。13は口縁下の内外面に沈線を巡らしている。14は突起下に外面は縦方向の沈線が施文され、内面には上下2個の円文を施文している。15は外面の突起下に縦方向の短沈線を施文し、その両側に円文を施文している。内面には上下2個の円文を施文している。16は外面の突起上に円文を施文し、突起下には対弧状に短沈線を2重に施文し、外側の沈線下には円文を施文している。内面には突起下に弧状の単沈線を施文し、その下には沈線を巡らしている。17は胴部の破片で、間隔を開けた2本沈線を帯状に施文している。12・13は加曾利B1式、14~16は加曾利B3式、17は加曾利B2から3式と考えられる。

18・19は後期後葉の曾谷式土器である。口縁

部の破片で、口縁部下には帯縄文を巡らしている。地文は単節LRの縄文である。

20~32は紐線文土器である。

20~23は後期中葉加曾利B式の紐線文土器である。口唇下に隆帯を巡らすもので、隆帯上には押玉が加えられている。胴部には斜方向に沈線を施文している。

24~32は後期後葉安行式の紐線文土器である。24~27は口縁部の破片である。24は口唇下に刻みを1条巡らすもので、胴部には斜方向に沈線を施文している。25~27は肥厚する口縁部下に胴部と区画する沈線文を巡らすもので、口唇直下には刻みを1条巡らしている。25の胴部には擦痕状の浅い沈線が斜方向に施文されている。24は安行1式、25~27は安行2式である。28~32は24~27などの胴部と考えられる破片である。器面には斜方向に沈線が施文されている。30~32の沈線文は浅く多条化している。

第III群土器 (第20図33~35)

後期前葉から中葉の底部を一括した。33・34は深鉢形土器、35は浅鉢形土器の底部と考えられる。34は底裏面に木葉痕が認められる。

第IV群土器 (第20図36)

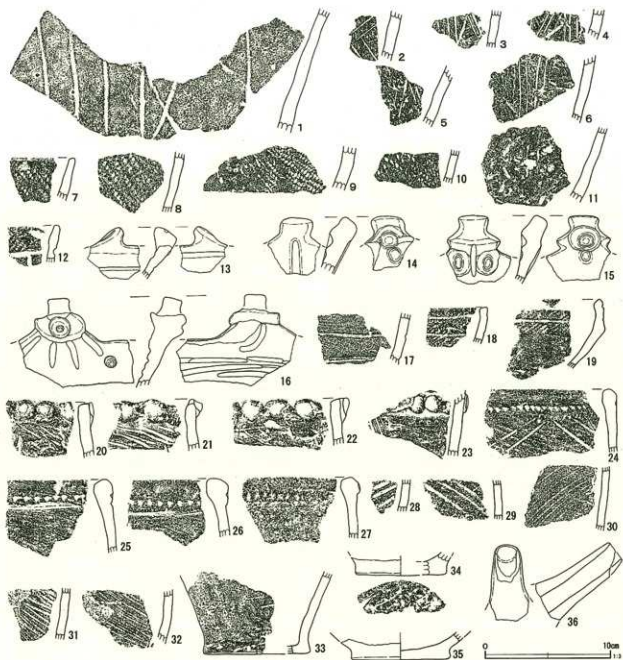
後期の注口土器を一括した。

36は注口部の破片である。胴部の破片は検出されなかったため、詳細な時期は不明である。

グリッド出土石器 (第21図37~43)

37~43は出土した石器である。

37~41は打製石斧である。37~39は側縁中央に柄れを持つもので、いわゆる分銅形である。37は表面の刃部側に自然面を持つものである。刃部は丸刃である。長さ14.3cm、幅8.6cm、厚さ4.1cm、重さ440.5gである。石材はホルンフェルスである。38は右側縁の一部を欠損するものである。刃部は丸刃である。残存する長さ11.2cm、幅7.6cm、厚さ2.8cm、重さ192.8gである。石材はホル

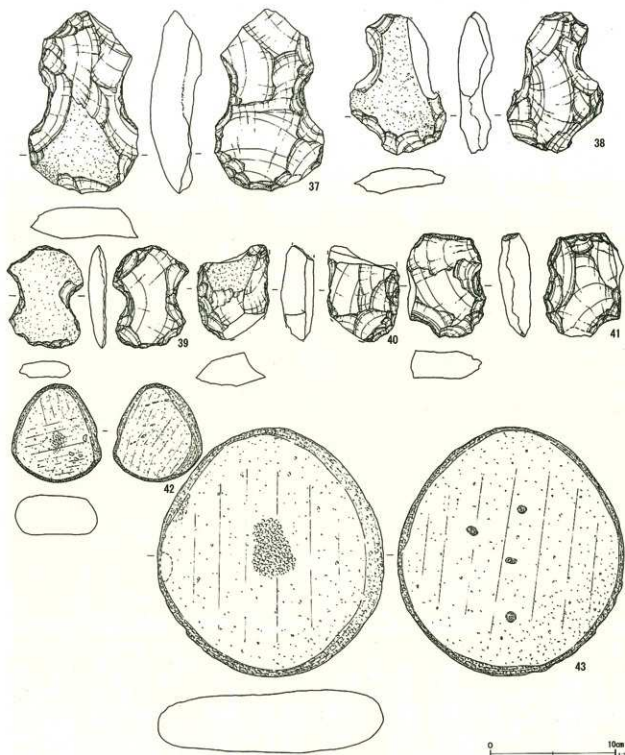


第20図 縄文時代の遺物 (1)

ンフェルスである。39は表面に大きく自然面を残すもので、剥片の周縁を調整して形状を作り出している。刃部は丸刃である。長さ8.0cm、幅6.0cm、厚さ1.4cm、重さ78.8gである。石材は頁岩である。40は基部と刃部の一部を欠損するため、全体の形状が不明である。残存する長さ7.5cm、幅5.6cm、厚さ2.7cm、重さ115.6gである。石材は黒色頁岩である。41は上端面と下端面の一部に自

然面が残存するもので、未製品と考えられる。左側縁の一部と刃部の一部を欠損している。残存する長さ8.2cm、幅6.35cm、厚さ2.5cm、重さ166.2gである。石材は頁岩である。

42は敲石である。上端面と下端面には、敲打痕が顕著に認められる。また表面の中央部にも、敲打痕がわずかだか認められる。平坦面を持つ表裏面は、器面が滑らかで光沢を持っており、磨面と



第21図 縄文時代の遺物（2）

しても使用された可能性が考えられる。長さ7.6cm、幅7.0cm、厚さ3.5cm、重さ264.3gである。石材は砂岩である。

43は石皿である。表裏面は平坦で、周縁全体に

敲打痕が認められる。表面の中央にも敲打痕が認められる。裏面には4ヶ所の凹部が認められる。長さ19.5cm、幅17.9cm、厚さ5.1cm、重さ2671.9gである。石材は閃緑岩である。

2. 住居跡

検出された住居跡は18軒で、いずれもC区で確認され、A・B区では検出されなかった。周溝状遺構がA区でのみ検出されたのと合わせて特徴的である。

第1号住居跡 (第23図)

I-10・11グリッドに位置する。第2・11号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。3軒とも遺存状況が極めて悪く、壁溝と貼床の下層部分のみが検出された。第1号住居跡では、東西方向の壁溝が1条検出できたにとどまる。

平面図上では、第2号住居跡の壁溝を切っているかのような表現となっているが、これは本住居跡の壁溝のほうが深いことによるもので、新旧関係を示すものではない。壁溝の規模は上場幅18~24cm、下場幅5~10cm、深さ5cmで、検出できた長さは2.28mである。ピットが3基検出された。ピットの径と深さは、P1が33×32×32cm、P2が30×28×50cm、P3が28×23×14cmである。

あえて計測するならば、主軸方位はN-64°-EもしくはN-26°-Wと推定される。P1~3は、本住居跡に伴うと判断したが確認はない。カマド・貯蔵穴などは確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

第2号住居跡 (第23図)

I-10・11グリッドに位置する。第1・11号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。3軒とも遺存状況が極めて悪く、壁溝と貼床の下層部分のみであった。第2号住居跡では、壁溝が「コ」の字状に、1条検出できたのみである。

平面図上では、第1号住居跡の壁溝に切られているかのような表現となっているが、これは第1号住居跡の壁溝のほうが深いことによるもので、新旧関係を示すものではない。壁溝の規模は上場幅14~24cm、下場幅4~15cm、深さ10cmで、検出できた長さは3.38mである。

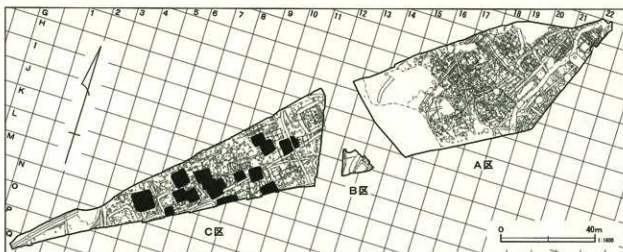
あえて計測するならば主軸方位は、N-60°-EもしくはN-30°-Wと推定される。P1は本住居跡に伴うと判断したが確認はない。ピットの径と深さは、22×17×25cmである。カマド・貯蔵穴などは確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

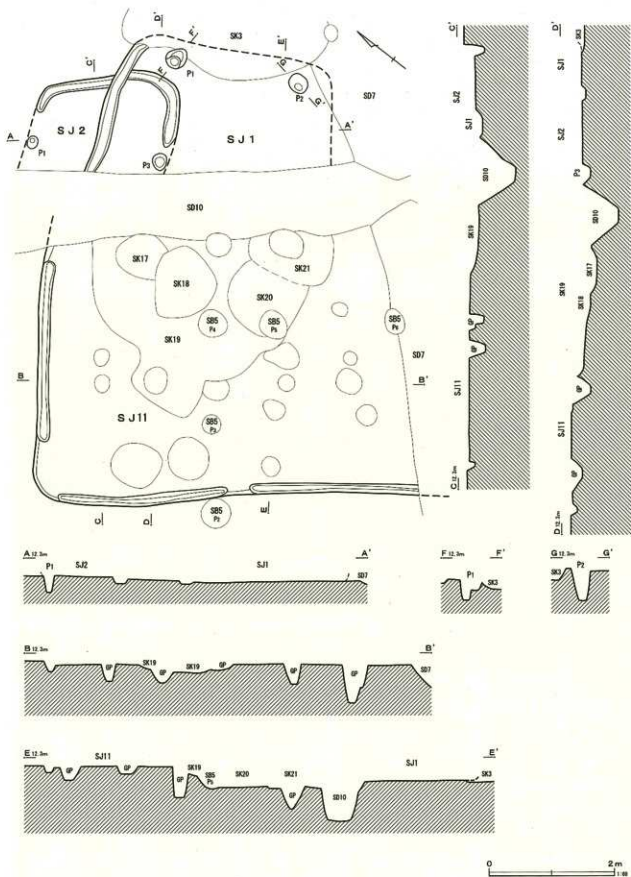
第3号住居跡 (第24~28図)

I・J-9グリッドに位置する。1つのピットを切っているほかは、重複するすべての遺構に切られていると推定される。

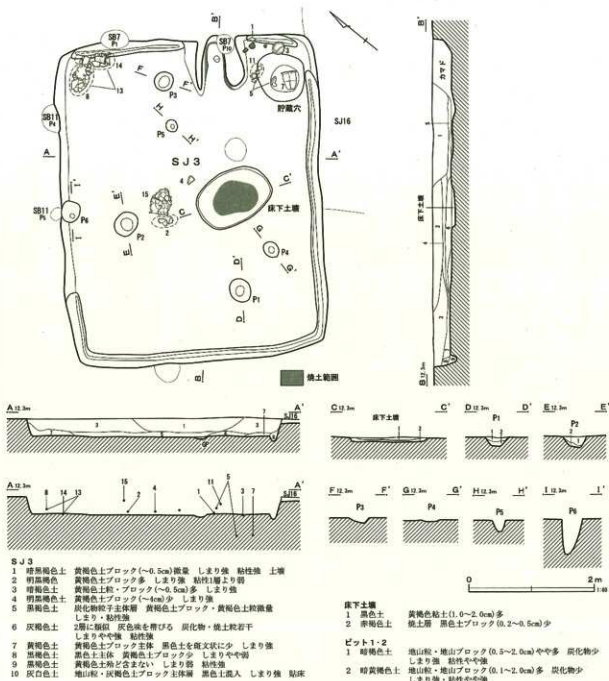
住居跡の平面形は、主軸方向に長い長方形である。規模は長軸5.17m、短軸4.15m、確認面からの深さ0.30m、主軸方位はN-50°-Eである。



第22図 住居跡分布図



第23图 第1·2·11号住居跡

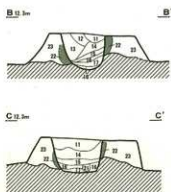
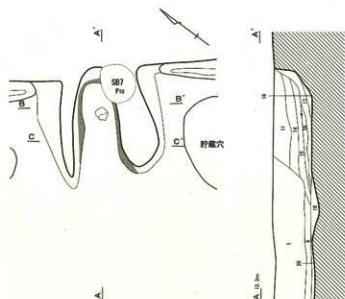


第24図 第3号住居跡

カマドは、北壁東寄りに設けられている。袖部が左右ともに確認されており、壁面からの残存規模は、右袖84cm、左袖86cmである。カマド構築土は、黄白色土や黄褐色土のブロックを含むもので(第21~23層)、22層は被熱のため赤色硬化した状態であった。燃焼部は床面から5cm程掘り窪められ、僅かに壁を切り込んでいる。煙出しの部分の立ち上がりは急で、垂直に近い。袖の燃焼部面

は被熱で赤色硬化し、焚口前面には焼土や炭が散っていた。焚口前面から住居跡中央にかけて、他の範囲以上の床面硬化が認められた。

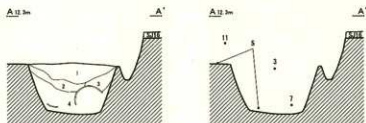
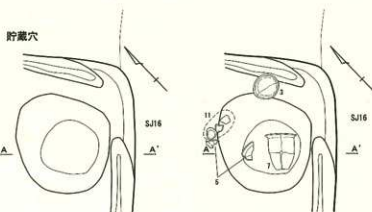
貯蔵穴は、カマド右脇のコーナー部にある。平面形は楕円形で径は82×76cm、深さ40cm。貯蔵穴内からは、土師器の瓶(7)が置かれた状態で出土した。この瓶には胴部中央に刺突によると推定される小孔と、小孔を中心とする十字のヒビが



9 J 3 カマド

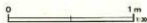
- 11 灰黒褐色土 黄白色土ブロック・焼土粒若干 しまり強
- 12 赤褐色土 銅壁からの焼土ブロック(～5cm)の残れ込み黒色土を挟む しまり弱
- 13 赤褐色土 焼土ブロック2層より少
- 14 黒褐色土 黄褐色土粒少 しまり強
- 15 暗赤褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土ブロック・焼土ブロック(～1cm)多 しまり強
- 16 黒褐色土 黄白色土粒土粒・焼土粒少 粘性強
- 17 暗赤褐色土 黒色土中に黒細焼土粒子多 粘性やや強

- 18 黒色土 黄褐色土ブロック(1.0～1.5cm)やや多
- 19 黒色土 黄褐色土ブロック(0.5～0.8cm)・灰褐色土ブロック(0.2～0.5cm)多 焼土ブロック(0.2～0.6cm)・炭化物(0.2～0.8cm)やや多
- 20 灰褐色土 赤色土ブロック(0.5cm)やや多 焼土ブロック(0.2～0.5cm)多
- 21 黄白色土 黄白色土ブロック 焼・天井構築土
- 22 赤褐色土 赤色化した粘土層
- 23 暗褐色土 黄褐色土ブロック(0.2～0.3cm)多 炭化物やや多 焼土ブロック(0.1～0.5cm)少

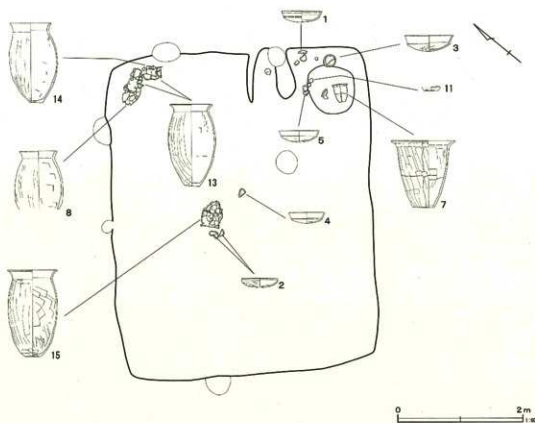


貯蔵穴

- 1 暗褐色土 地山粒やや多 地山ブロック(0.5～1.0cm) 炭化物若干 しまり強 粘性弱
- 2 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5～1.0cm)・焼土粒少 しまり強 粘性弱
- 3 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(1.0～2.0cm)・炭化物やや多 しまり強 粘性弱
- 4 暗黄褐色土 地山粒・地山ブロック(2.0～3.0cm)多 炭化物少 しまり強 粘性やや強



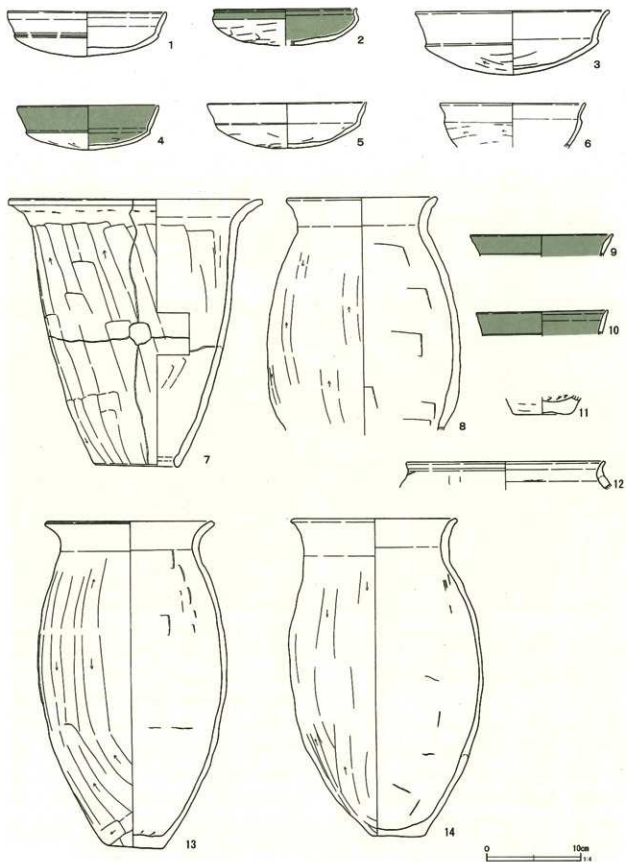
第25図 第3号住居跡カマド・貯蔵穴



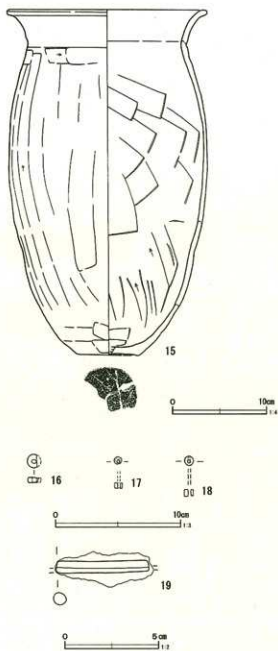
第26図 第3号住居跡遺物出土状況

第2表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ3	C	土師器	環	40	(16.8)		4.8	B C F G	普通	橙		No5
2	SJ3	C	土師器	環	60	15.2		[3.8]	A C F G	普通	橙		No7 内面・外面口縁部赤彩
3	SJ3	C	土師器	環	100	20.6	18.4	6.8	B C D F G	普通	橙		No10
4	SJ3	C	土師器	環	45	(14.8)		4.7	A F G J	普通	にぶい黄橙		No6 内外面赤彩 外面・底面黒度
5	SJ3	C	土師器	環	60	17.0		4.8	A F G	普通	橙		No3・9 器面風化顕著
6	SJ3	C	土師器	環	20	(15.4)		[4.7]	A C F G	普通	にぶい黄橙		
7	SJ3	C	土師器	瓶	100	26.8	8.7	28.3	A B C D F G	普通	淡黄橙		No11 貯蔵穴
8	SJ3	C	土師器	甕	80	(16.0)		[24.6]	A C D G	普通	灰黄褐		No1 器面風化顕著
9	SJ3	C	土師器	環	15	(15.2)		[2.3]	A F G	普通	橙		内外面赤彩
10	SJ3	C	土師器	環	20	(14.0)		[2.6]	B C F	普通	橙		内外面赤彩
11	SJ3	C	土師器	壺	90		6.5	[1.9]	G	普通	浅黄		器面風化顕著 調整はみえない
12	SJ3	C	土師器	甕	5	(21.2)		[2.9]	C G	普通	にぶい黄橙		
13	SJ3	C	土師器	甕	70	18.0	6.1	34.5	A B C D F G	普通	橙		
14	SJ3	C	土師器	甕	80	17.7	5.8	33.7	F G H	普通	にぶい黄橙		No2 被熱による赤色化顕著
15	SJ3	C	土師器	甕	50	(20.6)	5.5	36.7	A B C D F G	普通	にぶい黄橙		No8 外面摩滅 底部木炭痕
16	SJ3	C	石製品	白玉	40	長さ0.7cm 厚さ0.3cm 孔径0.15cm							滑石製
17	SJ3	C	石製品	白玉	45	長さ[0.6]cm 厚さ[0.4]cm 孔径0.2cm							滑石製
18	SJ3	C	石製品	白玉	75	長さ[0.7]cm 厚さ[0.5]cm 孔径0.7cm							滑石製
19	SJ3	C	鉄製品	棒状鉄製品		長さ[5.0]cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm 重さ12.5g							錆化著しい 両端部欠損



第27图 第3号住居跡出土遺物(1)



第28図 第3号住居跡出土遺物(2)

認められた。また、貯蔵穴脇から坏(3)が、西側コーナー部分では土師器の甕3点(8・13・14)等が、床面直上で出土している。

壁溝は、貯蔵穴脇のコーナー部分と北西壁面の一部途切れる。壁溝の規模は、上場幅10~18cm、下場幅5~8cm、深さ5~10cm。床下土壌が1基検出された。平面形は楕円形で、径は120×82cm、深さ8cmである。

これ等の他に、6基のピットが確認されたが、すべてが本住居跡に伴うか否かについては、確認が得られなかった。ピットの径と深さは、P1が39×33×13cm、P2が41×32×17cm、P3が32×29×9cm、P4が27×21×4cm、P5が20×17×18cm、P6が34×30×64cmである。

出土した遺物は、土師器の坏・壺・甕・甔のほか、石製白玉、鉄製品等であり、図化できたのは計19点(1~19)であった。住居跡の時期は、6世紀第3四半期と推定される。

第4号住居跡(第29~33図)

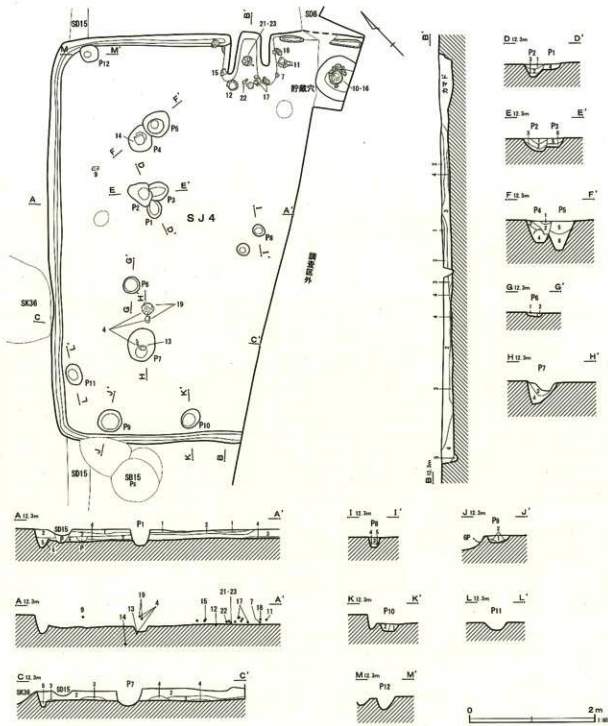
K・L-10グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると推定される。東辺と南辺の一部が調査区外に続いている。

住居跡の規模は、南北6.48mであるが、東西は4.85mまでの確認である。確認面からの深さ0.18m、主軸方位はN-45°-Eである。

カマドは、北壁に設けられている。袖部が左右ともに確認されており、壁面からの残存規模は、右袖75cm、左袖73cmである。カマド天井部の崩落土は明黒褐色土で、黄褐色粘土粒子を含む(第8~10層)。袖部の構築土は、黄褐色土ブロックを含む褐色土・黒褐色土および黒色土である(第12~14層)。燃焼部は、床面から8cm掘り窪められ、僅かに壁を切り込んでいる。被熱で若干赤色硬化し、焚口やカマド右袖の前面には焼土や炭が散っていた。煙出しの部分は、燃焼部先端から段をもって立ち上がる。焚口前面から居居中央にかけて、他の範囲以上の床面硬化が認められた。

貯蔵穴は、カマドの右脇にある。平面形は楕円形と推定され、径は72×[50]cm、深さ26cm。貯蔵穴内から坏(1)・壺(16)・甕(10)各1点が出土した。また、カマド燃焼部から甔(23)と左袖の手前および右袖脇から甕(11・12・18)が、焚口手前からも甕(17)が出土している。

壁溝は、確認範囲内では一巡している。壁溝の規模は、上場幅6~17cm、下場幅3~8cm、深さ



- S J 4**
- 1 明黒褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 明黒褐色土
 - 5 黒褐色土
 - 6 黒褐色土

- 1 黄褐色土ブロック少 しまりやや弱
- 2 黄褐色土ブロック多 しまりやや強
- 3 黄褐色土ブロック少 しまりやや強
- 4 黄褐色土ブロック多 しまりやや強
- 5 粘性強 均質
- 6 黄褐色土ブロック少 5層ベース

- ビット 1・2・3**
- 1 暗褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 暗褐色土

- 1 地山粒・地山ブロック若干 しまり強 粘性やや弱
- 2 地山粒・地山ブロック・黄土ブロック 量多 しまり強 粘性やや弱
- 3 地山粒・地山ブロック 黄土ブロック少 しまり強 粘性やや弱
- 4 炭化物・黄土少 しまり強 粘性やや弱
- 5 地山粒・炭化物少 しまり強 粘性やや弱
- 6 地山粒・炭化物多 しまり強 粘性やや弱

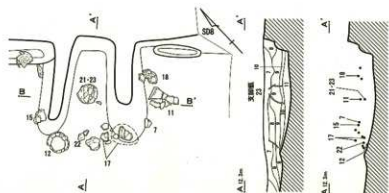
- ビット 4・5**
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 黒褐色土

- 1 地山粒・地山ブロック少 しまり強 粘性やや弱
- 2 地山粒・地山ブロック・黄土ブロック少 しまり強 粘性やや弱
- 3 地山粒・黄土ブロック少 しまり強 粘性やや弱
- 4 地山粒・黄土ブロック・地山ブロックやや多 しまり強 粘性やや弱
- 5 地山粒・炭化物量多 しまり強 粘性やや弱
- 6 黒褐色土

- ビット 6-11**
- 1 暗褐色土
 - 2 黄褐色土
 - 3 黄褐色土
 - 4 黄褐色土
 - 5 黄褐色土
 - 6 黄褐色土

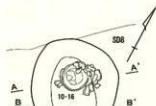
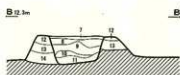
- 1 地山ブロック層状に少 しまり・粘性強
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土ブロック主体 しまり・粘性強
- 4 黄褐色土 均質 粘子強 しまり・粘性やや弱
- 5 黄褐色土少 しまりやや強
- 6 黄褐色土ブロック少

第29図 第4号住居跡



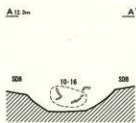
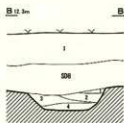
S J A カマド

- | | |
|----------|---|
| 7 茶褐色土 | 焼土ブロック・焼土粒・黄白色土粒少
しまりやや強 |
| 8 赤褐色土 | 焼土ブロック主体層 天井崩落土
しまり強 |
| 9 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック少 しまりやや強
粘性強 |
| 10 明黒褐色土 | 黄褐色粘土粒多 天井崩落土 粘性強 |
| 11 暗黒褐色土 | 炭化物粒多 煙道壁 |
| 12 褐色土 | 黄褐色土ブロック多 焼土粒やや多 |
| 13 黒褐色土 | 黄褐色土ブロック (1.0~2.0cm) やや多
焼土粒 (0.5cm) 多 炭化物 (0.1~0.2cm) 少 |
| 14 黒色土 | 黄褐色土ブロック (0.2~0.5cm)
炭化物 (0.1~0.2cm) やや多 |

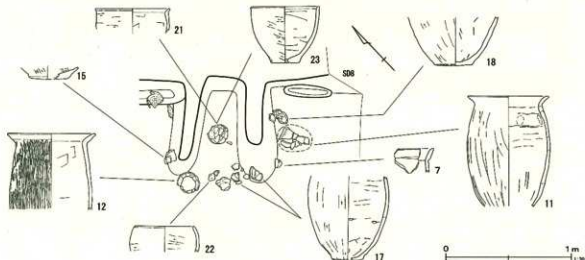


貯蔵穴

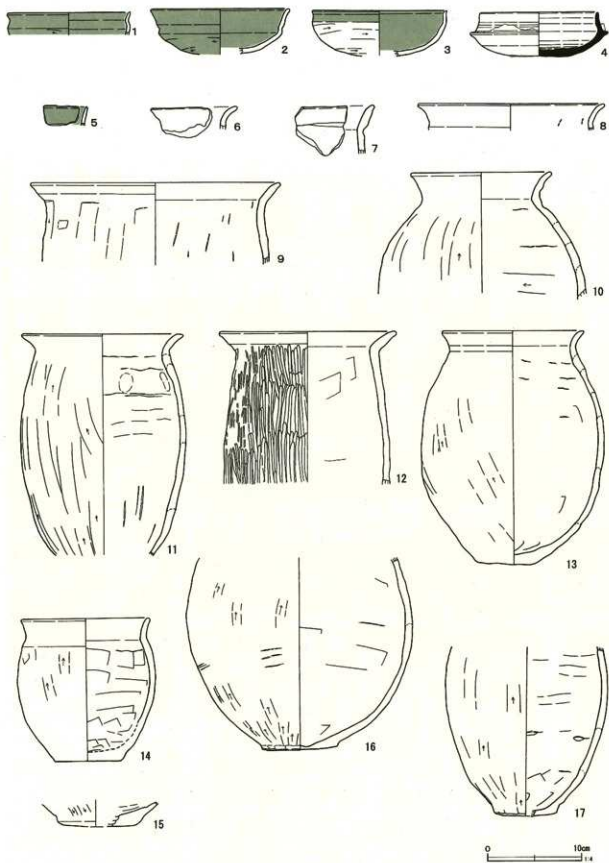
- | | |
|---------|---|
| 1 耕作土 | 炭化物微量 しまり強 粘性弱 |
| 1 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒・焼山ブロック (0.5cm) 少 |
| 2 暗褐色土 | しまり強 粘性弱 |
| 3 暗褐色土 | 焼山ブロック (1.0~2.0cm) 多 焼土ブロック
(0.5~1.0cm) 少 しまり強 粘性弱 |
| 4 暗黄褐色土 | 焼山ブロック (2.0~3.0cm) 極多 焼土ブロック
(0.5~1.0cm) 微量 しまり強 粘性弱 |



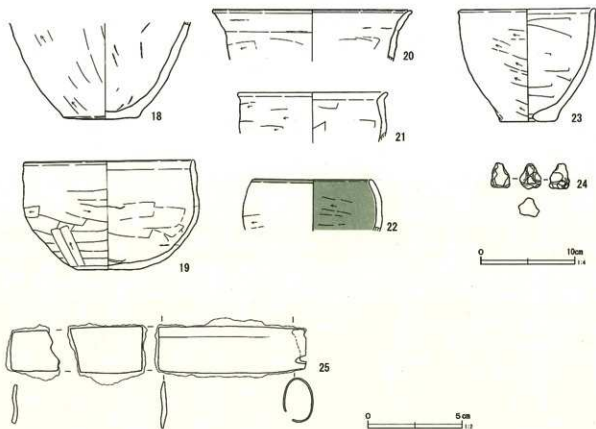
第30図 第4号住居跡カマド・貯蔵穴



第31図 第4号住居跡カマド遺物出土状況



第32图 第4号住居跡出土遺物(1)



第33図 第4号住居跡出土遺物(2)

第3表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ4	C	土師器	坏	5	(13.0)		[2.5]	A F	普通	明赤褐		貯蔵穴 内外面赤彩
2	SJ4	C	土師器	坏	25	(14.8)		[4.9]	A D G H	良好	明赤褐		内外面赤彩
3	SJ4	C	土師器	坏	40	14.2		[4.8]	A G H	良好	にぶい 褐		P2 内面・外面口縁部赤彩 外面底部 黒炭
4	SJ4	C	須恵器	坏	80	(12.6)	6.0	4.7	A G H	良好	灰	轆轤	No.2・3・4 重ね焼きした別個個体の胎土 付着。そのため欠損部分あり
5	SJ4	C	土師器	坏	5			[2.1]	A B F H	普通	橙		内外面赤彩か
6	SJ4	C	土師器	甕	5			[2.5]	A D F G	普通	にぶい 黄橙		器面風化顕著
7	SJ4	C	土師器	甕	5			[5.2]	A B F G	普通	にぶい 橙		カマF No.14 器面風化顕著
8	SJ4	C	土師器	甕	5	(19.6)		[2.7]	A B F J	普通	にぶい 橙		
9	SJ4	C	土師器	甕	20	(26.6)		[8.7]	C D G	良好	灰褐		No.1
10	SJ4	C	土師器	甕	60	15.0		[13.6]	A B C D F	良好	灰黄		貯蔵穴No.1
11	SJ4	C	土師器	甕	60	17.2		[23.2]	A C F G	普通	にぶい 黄橙		カマF No.15 器面摩滅顕著
12	SJ4	C	土師器	甕	25	(18.8)		[16.0]	A C D G	普通	灰褐		カマF No.5 ヘラ削り後ヘラ磨き
13	SJ4	C	土師器	甕	95	(15.0)	6.0	24.5	A C D G H	普通	黄灰		No.4 被熱のため赤色化 煤付着
14	SJ4	C	土師器	小型甕	100	13.8	7.1	15.1	B C F G	普通	灰褐		P4 No.1 炭化物・煤付着
15	SJ4	C	土師器	甕	70		(8.5)	[2.6]	A F G K	普通	明赤褐		カマF No.4
16	SJ4	C	土師器	壺	45		8.0	[20.3]	A C D F G	普通	黒		貯蔵穴No.1 ヘラ削り後丁寧なヘラナゲ

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
17	SJ4	C	土師器	甕	25		(6.6)	[17.9]	A B C D F G	普通	にぶい 灰		カマドNo.10-13 筒状により赤色化 器面(上半)風化顕著
18	SJ4	C	土師器	甕	30		7.0	[10.4]	A D F G H	普通	灰黄		カマドNo.16
19	SJ4	C	土師器	鉢	80	(18.1)	7.0	11.6	A D F G H	普通	灰白		No.2-3
20	SJ4	C	土師器	瓶か	10	(21.2)		[5.5]	A D F G	普通	明褐		カマド
21	SJ4	C	土師器	鉢	25	(15.8)		[5.5]	A F	普通	にぶい 黄橙		カマドNo.1
22	SJ4	C	土師器	鉢	10	(13.4)		[5.6]	C F J	普通	にぶい 橙		カマドNo.6 内面赤彩残存 外面赤彩 剥離か
23	SJ4	C	土師器	瓶	50	(14.6)	(6.0)	12	A F J	普通	にぶい 赤褐		カマドNo.1
24	SJ4	C	貝塚穴 痕泥岩			2.6cm×2.2cm×1.8cm				重さ7.5g			カマド 6孔 被熱のため赤色化
25	SJ4	C	鉄製品	鎌か		長さ14.0cm 幅2.1~2.4cm				厚さ0.2~0.3cm 重さ95.2g			

7~12cmである。以上の他に、13基のピットが確認されたが、すべてが本住居跡に伴うか否かは確認が得られなかった。ピットの径と深さは、P1が30×23×8cm、P2が40×31×20cm、P3が28×28×14cm、P4が35×38×24cm、P5が45×40×49cm、P6が26×26×5cm、P7が52×43×35cm、P8が20×18×8cm、P9が20×16×15cm、P10が38×35×12cm、P11が35×26×12cm、P12が33×25×14cm、P13が30×26×18cmである。

出土した遺物は土師器の坏・甕・瓶・壺・鉢、須恵器の坏のほか、鉄製品・貝塚穴痕泥岩など計25点(1~25)であった。住居跡の時期は、6世紀第2四半期と推定される。

第5号住居跡(第34・35図)

K・L-9グリッドに位置する。2つのピットを切っているほかは、重複するすべての遺構に切られていると推定される。

住居跡の東辺は、第7号溝跡によって失われている。規模は南北4.25m、東西は3.62mまでの確認である。確認面からの深さ0.18m、主軸方位はN-43°-Eである。

カマドは南壁に設けられている。袖部が左右ともに確認されており、壁面からの残存規模は、右袖30cm、左袖78cmである。燃焼部の掘り込みは浅く、25cmほど壁を切り込んでいる。煙出しの部分の立ち上がりは緩やかである。カマド内の被熱の度合いは低い。

壁溝は一部途切れる。壁溝の規模は、上場幅8~32cm、下場幅3~13cm、深さ5~10cmである。

2基の土壌と、4基のピットが検出されたが、すべてが本住居跡に伴うか否かについては、確認が得られなかった。但し、土壌には貯蔵穴の可能性が考えられる。これらの径と深さは、第1号土壌が70×55×15cm、第2号土壌が73×71×53cm、P1が45×40×20cm、P3が50×35×23cm、P4が55×40×12cm、P5が30×30×12cmである。床面直上から、土師器の瓶(15・16)が2点重ねられた状態で出土した。

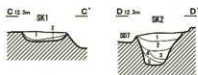
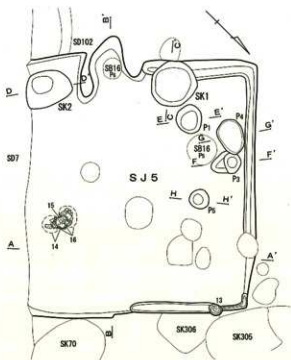
図化できた遺物は土師器の坏・壺・甕・瓶など、計16点(1~16)であった。住居跡の時期は、6世紀第2四半期と推定される。

第6号住居跡(第36~38図)

K-9・10グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると推定される。

住居跡の平面形は、主軸方向に長い長方形である。規模は長軸5.30m、短軸5.10m、確認面からの深さ0.15m、主軸方位はN-30°-Wである。

カマドは、北壁東寄りに設けられている。遺存状況が良好とまではいえないものの、袖部が左右ともに確認された。壁からの残存規模は、右袖123cm、左袖98cmである。カマド構築土は、暗黄褐色の地山ブロックである(第11・12層)。燃焼部の掘り込みは浅いもので平坦に近く、壁の切り込みも僅かである。煙出しの部分の立ち上がりは急で、垂直に近い。カマド土層断面にみる第11層は、被



SJ5

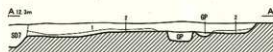
- 1 黒褐色土 黄褐色土ブロック少 しまり・粘性強
- 2 黒褐色土 黄褐色土ブロック多 しまりや弱

SK1

- 1 黒褐色土 粘土ブロック少 黄褐色土粒(~1cm)混入
- 2 黄褐色土 黄褐色土主体層 しまりや弱

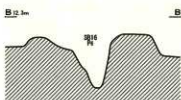
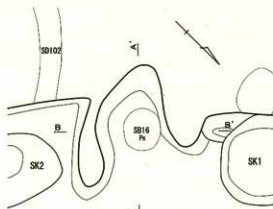
SK2

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒(~0.5cm)少 しまりや弱
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒(~1cm)や中多 しまりや弱 粘性強
- 3 黄褐色土 黄褐色土ブロック(~5cm)主体層 粘性強
- 4 黒褐色土 黄褐色土ブロック(~4cm)少 粘性強
- 5 黒褐色土 黄褐色土ブロック(~4cm)多 粘性強



ビット1・3・4・5

- 1 灰黒褐色土 黄褐色土粒(~0.5cm)微量 しまり・粘性強
- 2 灰黒褐色土 黄褐色土粒ブロック多 しまり強
- 3 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック主体層 しまり強
- 4 暗褐色土 黄褐色土・黒土を混文状に少 しまりや弱
- 5 黄褐色土 黄褐色土主体層

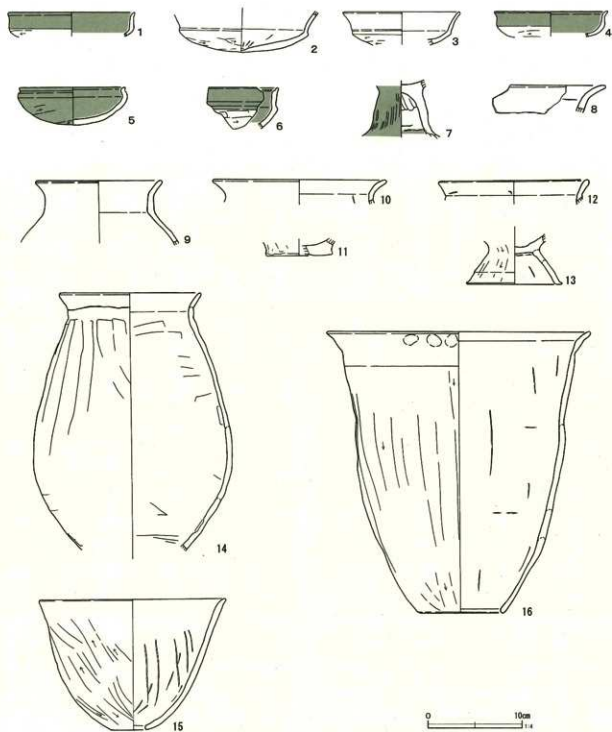


SJ5 カマド

- 1 暗褐色土 粘土粒・黄褐色土粒・黄褐色土ブロック少
- 2 暗黄褐色土 黄褐色土主体層 天舟跡層土か
- 3 暗赤褐色土 1層に類似 粘土粒多



第34図 第5号住居跡・カマド



第35図 第5号住居跡出土遺物

熱により変色しているものの、赤色硬化は弱く、カマド内の被熱の度合いは低いものであった。

貯蔵穴はカマド右脇の、コーナー部にある。平面形は隅丸長方形で、径102×86cm、深さ45cmで底面は平坦である。

壁溝は遺存部分では一巡しており、上場幅12～22cm、下場幅5～8cm、深さ10～15cmである。

8基のピットが確認されたが、すべてが本住居跡に伴うか否かについては、確証が得られなかった。P 8は、本住居跡に伴わない井戸跡の可能性

第4表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型 技法	備考
1	SJ5	C	土師器	坏	10	(13.4)		[2.6]	A B D F G	普通	赤		内外面赤彩
2	SJ5	C	土師器	坏	25			[4.5]	A F	普通	橙		
3	SJ5	C	土師器	坏	10	(12.4)		[3.6]	C F J	普通	にぶい 黄橙		
4	SJ5	C	土師器	坏	10	(12.0)		[2.7]	A C F J	普通	赤褐		内外面赤彩 器面風化
5	SJ5	C	土師器	坏	40	(11.2)		4.0	A F G	普通	にぶい 赤褐		内外面赤彩
6	SJ5	C	土師器	坏	10	(13.8)		[4.4]	A B D F G	普通	赤褐		口縁部内外面赤彩
7	SJ5	C	土師器	高坏	90			[6.1]	B C F G	普通	にぶい 橙		坏部内面から脚部内面下半まで赤彩
8	SJ5	C	土師器	甕	10	(21.0)		[3.0]	A C F	普通	にぶい 黄橙		
9	SJ5	C	土師器	甕	10	(14.0)		[6.7]	A F H J	普通	橙		器面風化顕著
10	SJ5	C	土師器	甕	25	(18.4)		[2.6]	A B C F G	普通	にぶい 橙		
11	SJ5	C	土師器	壺	20		(7.1)	[1.7]	A B C F I	普通	にぶい 橙		器面風化顕著 調整はみられない
12	SJ5	C	土師器	甕	15	(16.0)		[2.5]	A G	普通	にぶい 黄橙		
13	SJ5	C	土師器	白付甕	90		(10.2)	[5.2]	A B C G	普通	赤褐		No6 内面黒褐色
14	SJ5	C	土師器	甕	50	15.1		[27.2]	A B C F G K	普通	にぶい 黄橙		No1-4 器面風化顕著 調整はみられない
15	SJ5	C	土師器	甕	95	19.8	3.9	13.9	A C F G	普通	にぶい 橙		No3 ヘラ削り後粗いナデ
16	SJ5	C	土師器	甕	50	(28.0)	(9.0)	29.6	A C D F	普通	にぶい 黄橙		No2-4-5 内外面黒斑

が高い。ピットの径と深さは、P 2 が38×28×26 cm、P 3 が34×25×28cm、P 4 が87×25×28cm、P 5 が(47)×58×24cm、P 6 が40×35×27cm、P 7 が20×20×17cm、P 8 が41×36×122cm、P 9 が(52)×55×32cmである。

出土した遺物は、土師器の坏・蓋・鉄製品等、計4点(1~4)である。住居跡の時期は、8世紀第1四半期と推定される。

第7号住居跡(第39・40図)

L・M-8グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると推定される。遺存状況は悪く、部分的な壁溝と壁面の立ち上がりからプランを復元した。

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸5.42m、短軸5.36m。確認面からの深さ0.13m、長軸方位はN-47°-Wである。カマドや貯蔵穴・ピットは検出されなかった。壁溝は一部途切れており、規模は上場幅10~23cm、下場幅4~10cm、深さ5cm前後で、部分的に途切れると推定される。床面のほぼ全体が貼床であった。

出土した遺物は、土師器、須恵器の坏など計4

点(1~4)である。住居跡の時期は、6世紀第2四半期と推定される。

第8号住居跡(第41・42図)

L・M-8・9グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると推定される。南部分は調査区外に続く。規模は東西8.78m、南北残存長2.42m。確認面からの深さ0.16m、主軸方位はN-58°-EもしくはN-32°-Wである。調査範囲内では、カマドや貯蔵穴・ピット・壁溝等は確認されなかった。

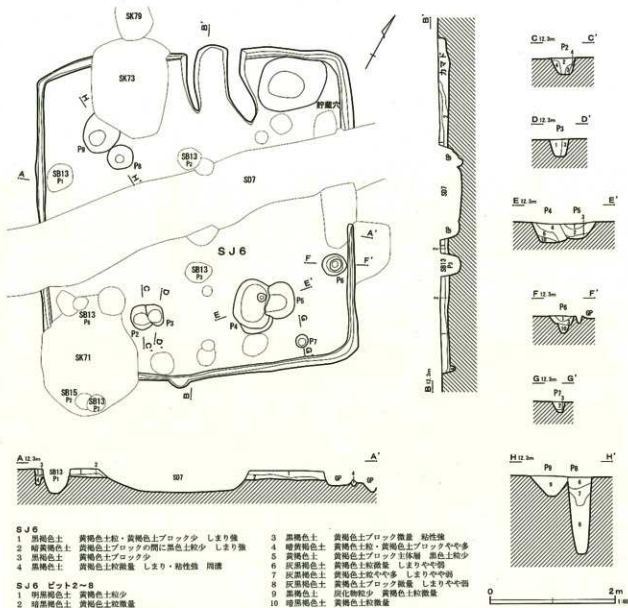
図化できた遺物は、土師器の坏・甕・須恵器の碗や鉄製品など計15点(1~15)である。住居跡の時期は、7世紀第4四半期と推定される。

第9号住居跡(第43~45図)

M-6・7グリッドに位置する。

平面形は主軸方向に長い長方形であり、カマドの右側は左側に比べ奥行きをもつ。規模は長軸5.02mと4.67m、短軸4.63m、確認面からの深さ0.10m、主軸方位はN-53°-Eである。

カマドは南壁に設けられている。袖部が左右ともに確認されており、壁からの残存規模は、右袖



第36図 第6号住居跡

68cm、左袖58cmである。カマド土層断面中3層はカマド天井部の構築土である。燃烧部の掘り込みと、壁の切り込みは僅かである。煙出しの部分の立ち上がりは緩やかである。燃烧部と焚口部は被熱により赤色硬化している。貯蔵穴はカマド左脇の、コーナー部にある。平面形はほぼ円形で、径は63×68cm、深さ28cmで底面は平坦である。貯蔵穴内からは、土師器の甕2点(13・14)が土圧で潰れた状態で出土した。壁溝は全周せず、途切れている。壁溝の規模は上場幅15~25cm、下場幅3~8cm、深さ5~15cm。ビットは確認されな

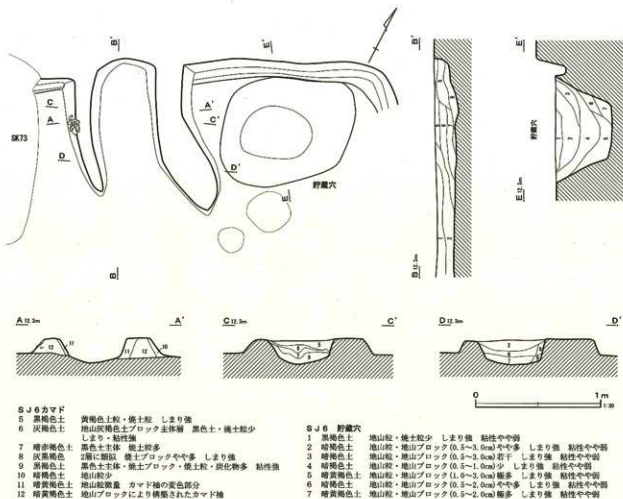
かった。

凶化できた遺物は、土師器の環・甕・瓶・鉢等計14点(1~14)である。住居跡の時期は、6世紀第1四半期と推定される。

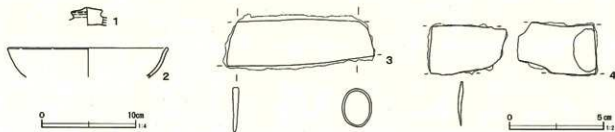
第10号住居跡(第46~49図)

L-6・7グリッドに位置する。第232号土塊を切っているほかは、重複するすべての遺構に切られていると推定される。

平面形はほぼ正方形である。規模は主軸6.13m、長軸6.35m、確認面からの深さ0.14m、主軸方位はN-45° -Eである。



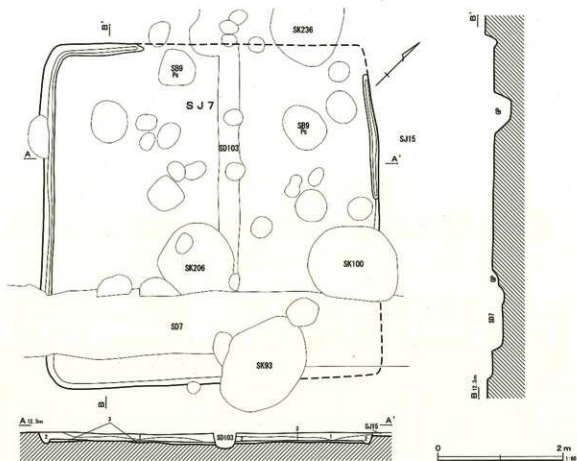
第37図 第6号住居跡カマド・貯蔵穴



第38図 第6号住居跡出土遺物

第5表 第6号住居跡出土遺物観察表

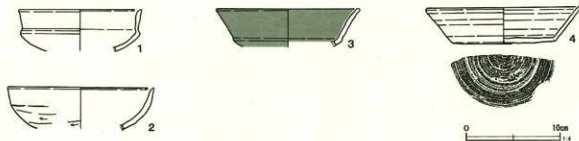
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ6	C	土師器	蓋	80			1.9	A C F G	普通	にぶい 粒	轆轤	
2	SJ6	C	土師器	環	10	(17.0)		[3.2]	A D F G	普通	にぶい 遺物		器面風化顕著
3	SJ6	C	鉄製品	小刀か		長さ[7.7]cm 重さ35.9g	幅2.5cm	厚さ0.1~0.3cm					錆化著しい 両端部欠損
4	SJ6	C	鉄製品	鎌		長さ[4.1+4.0]cm 0.2cm	幅2.5cm	厚さ0.1~0.3cm					錆化著しい



SJ7

- 1 黒褐色土 地山ブロック(0.5~1.0cm)少 地山粒多 しまりやや強 粘性弱
 2 黒褐色土 地山ブロック(1.0~2.0cm)やや多 地山粒多 しまりやや強 粘性弱
 3 暗黄褐色土 地山ブロック(1.0~2.0cm)多 地山粒多 しまりやや強 粘性弱 粘床

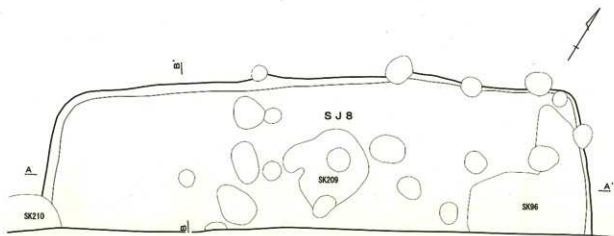
第39図 第7号住居跡



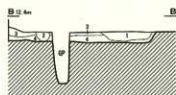
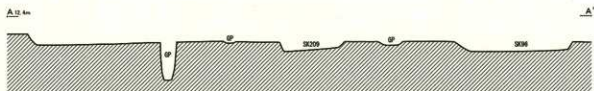
第40図 第7号住居跡出土遺物

第6表 第7号住居跡出土遺物観察表

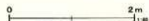
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ7	C	土師器	坏	10	(13.0)		[4.4]	A D F G	普通	明赤褐		器面風化顕著
2	SJ7	C	土師器	坏	20	(15.4)		[4.5]	A C F	普通	に近しい褐		
3	SJ7	C	土師器	高坏	20	(15.3)		[4.0]	B C D G	普通	橙		内外面赤彩
4	SJ7	C	須恵器	坏	35	(16.4)	(10.8)	3.9	A C G H	良好	黄灰	轆轤	未野



調査区外



- S J B
- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 黒褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5~2.0cm)少
粘土粘着度 しまり強 粘性やや弱 土層 |
| 2 | 黒褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)少
しまり強 粘性やや弱 ビット |
| 3 | 暗褐色土 | 地山粒少 地山ブロック(0.5cm)多
しまり強 粘性弱 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5cm)極多
しまり強 粘性弱 |



第41図 第8号住居跡

カマドは北壁東寄りに設けられている。袖部が左右ともに確認されており、壁からの残存規模は、右袖114cm、左袖109cmである。燃焼部は6cm程掘り窪めた浅いもので、壁の切り込みはみられない。カマド内の被熱の度合いは低い。カマド周辺には炭や焼土が認められた。左袖には、土師器甕(2)が補強材として倒立した状態で検出された。また、燃焼部からは甕(1)と壺(4)、焚口手前からは甕(5)の破片が出土した。壁溝は全周せず途切れる。壁溝の規模は上場幅12~16cm、下場幅4~8cm、深さ6~10cm。貯蔵穴・ビットは確認されなかった。

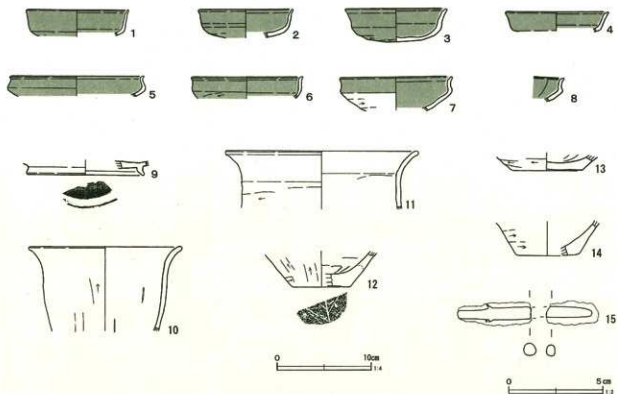
出土した遺物は、土師器の壺・高坏・甕・甌な

ど計9点(1~9)である。住居跡の時期は、6世紀第4四半期と推定される。

第11号住居跡(第23図)

I・J-10グリッドに位置する。第1・2号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

3軒とも遺存状況が極めて悪く、壁溝と貼床の下層部分のみが検出された。第11号住居跡では、北辺と西辺の壁溝が検出できたのみである。住居跡の残存規模は、南北6.18m、東西4.08m、確認面からの深さは5cm程である。壁溝の規模は、上場幅13~18cm、下場幅2~12cm、深さ5~10cmである。あえて計測するならば主軸方位は、N-52°-EもしくはN-38°-Wと推定される。カ



第42図 第8号住居跡出土遺物

第7表 第8号住居跡出土遺物観察表

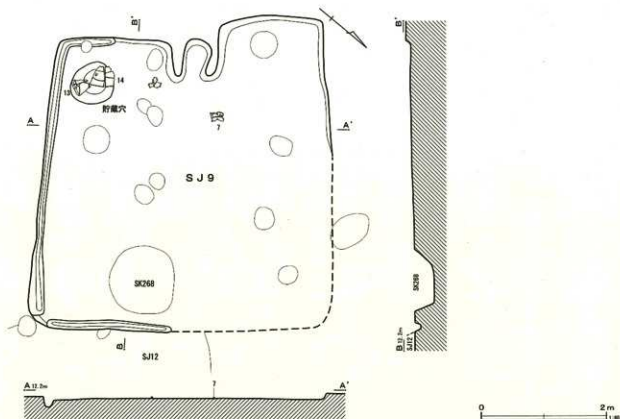
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ8	C	土師器	坏	10	(10.8)		[2.8]	C G	良好	にぶい赤褐色		内外面赤彩
2	SJ8	C	土師器	坏	20	(10.0)		[3.0]	A C F	普通	にぶい赤褐色		内外面赤彩
3	SJ8	C	土師器	坏	25	(10.8)		3.5	A F G	普通	にぶい赤褐色		内外面赤彩
4	SJ8	C	土師器	坏	10	(11.0)		[2.1]	A C F	普通	橙		内面・外面口縁部赤彩 器面風化
5	SJ8	C	土師器	坏	20	(14.2)		[2.2]	A C F G	普通	にぶい赤褐色		内外面赤彩
6	SJ8	C	土師器	坏	10	(11.8)		[2.4]	G	良好	にぶい橙		内外面赤彩
7	SJ8	C	土師器	坏	25	(11.8)		[3.6]	A B C G	普通	橙		内面・外面一部赤彩
8	SJ8	C	土師器	坏	5			[2.5]	A F G	良好	にぶい赤褐色		内面・外面口縁部赤彩
9	SJ8	C	須恵器	高台付 盃	15	(12.4)	[1.6]	[1.6]	A G	良好	灰	轆轤	
10	SJ8	C	土師器	甌	10	(23.8)		[9.0]	A F G	普通	にぶい橙		器面風化顯著
11	SJ8	C	土師器	甕	15	(20.4)		[6.1]	A C D F G	普通	にぶい橙		
12	SJ8	C	土師器	甕	30	(6.0)	(6.0)	[3.8]	A C D F	普通	にぶい黄褐色		底部木葉痕
13	SJ8	C	土師器	甕	40	(7.6)	(7.6)	[1.6]	A C F	普通	にぶい黄褐色		
14	SJ8	C	土師器	甕	15	(6.6)	(6.6)	[3.7]	B C G I	普通	橙		器面風化顯著 調整はみえない
15	SJ8	C	鉄製品	棒状 鉄製品		長さ [3.8+2.3 cm ×0.6cm-0.4×0.6cm		幅0.6~0.7cm 重さ7.0+3.7g		径0.6			2点が同一個体と思われる 錆化著しい

マドや貯蔵穴、ピットなどは確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

第12号住居跡 (第50~52図)

M-7グリッドに位置する。遺構の遺存状況は極めて悪く、ピット1つを切っているが、第342・345号土壌・ピットに切られる。



第43図 第9号住居跡

平面形は長方形と推定される。遺構残存部からみた規模は東西(4.65)m、南北5.18m、確認面からの深さ0.14m、主軸方位はN-48°-EもしくはN-42°-Wである。壁溝が巡るのは部分的で、規模は上場幅13~18cm、下場幅5~10cm、深さ5cm程である。

本住居跡に伴うと推定される土城(第1号土城)が1基検出された。平面形は円形に近い楕円形で、径は85×80cm、深さ14cm、断面形は皿状である。床面下から2基のピットが切り合う状態で検出されたが、これらが本住居跡に伴うか否かについては、確証が得られなかった。ピットの径と深さは、P1が50×45×15cm、P2が(75)×65×18cmである。カマドや貯蔵穴は検出されなかった。

図化できた遺物は、土師器の杯・壺・甕など計13点(1~13)である。住居跡の時期は、7世紀第2四半期と推定される。

第13号住居跡 (第53図)

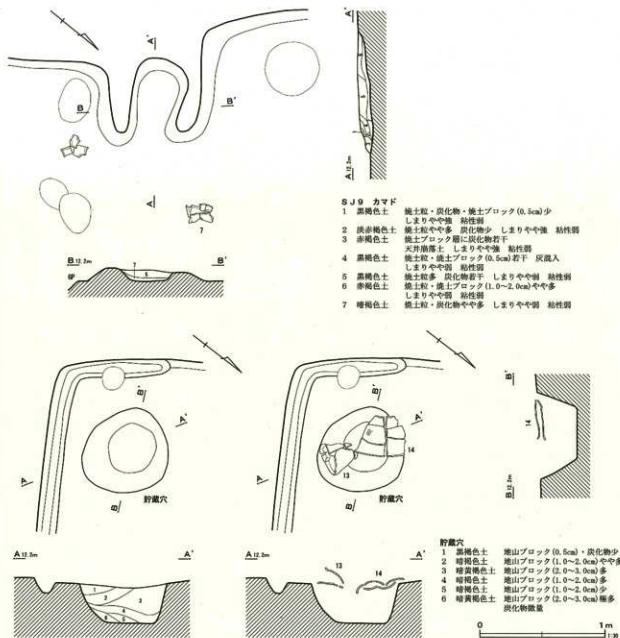
N-6グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っている他は、重複するすべての遺構に切られていると推定される。南部分は調査区外に続き、東部分はプランが失われていた。残存規模は東西3.14m、南北3.05m。確認面からの深さ0.05m、主軸方位はN-55°-EもしくはN-35°-Wである。

カマドや貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。確認範囲内では、壁溝が一巡している。壁溝の規模は、上場幅8~18cm、下場幅3~14cm、深さ5cm程である。

遺物は出土しなかった。

第14号住居跡 (第54~56図)

M-5、N-5・6グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると推定される。数多くの遺構と重複していることと、後世、畑として耕作されたことにより、遺構の遺存状況は極めて悪いものであった。住居跡の北辺は壁の立ち

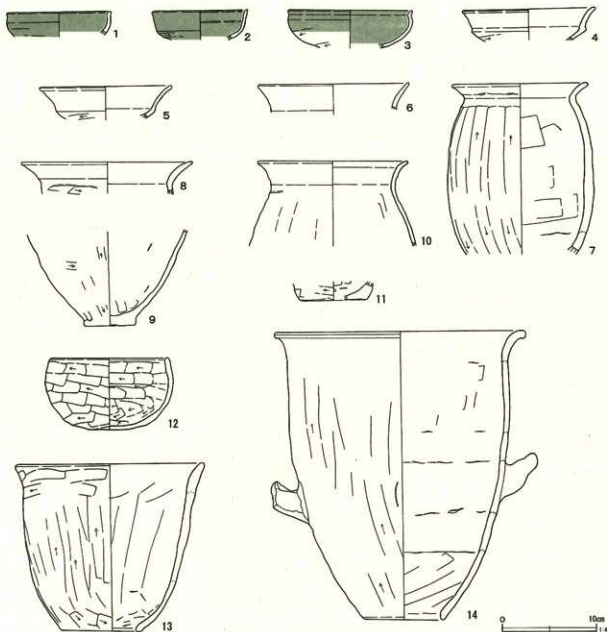


第44図 第9号住居跡カマド・貯蔵穴

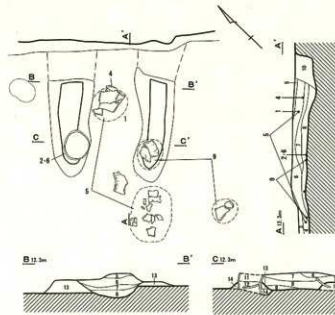
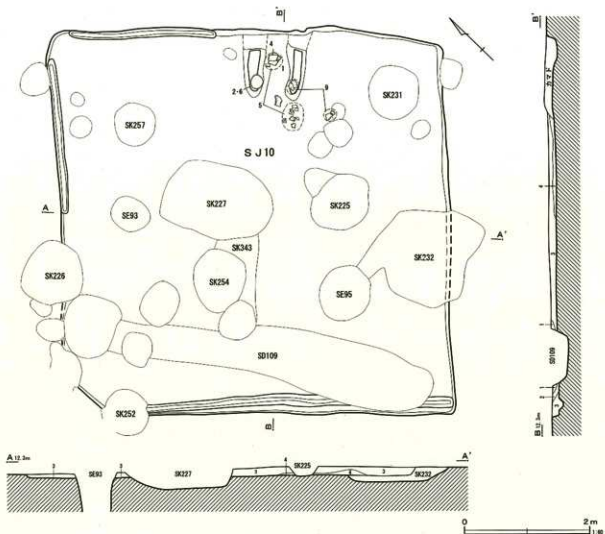
第8表 第9号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ9	C	土師器	坏	10	(11.0)		[2.6]	A D F G	良好	赤		内外面赤彩
2	SJ9	C	土師器	坏	20	(10.1)		[3.1]	A B C D H	普通	橙		内外面赤彩
3	SJ9	C	土師器	坏	15	(13.1)		[4.0]	A C F G	普通	にぶい 橙		内外面赤彩
4	SJ9	C	土師器	坏	15	(14.0)		[3.5]	A D F G	普通	橙		器面風化顕著
5	SJ9	C	土師器	坏	15	(14.0)		[3.5]	A B D F G	普通	橙		器面風化顕著
6	SJ9	C	土師器	甕	15	(16.0)		[2.9]	A F	普通	橙		器面風化
7	SJ9	C	土師器	甕	45	(14.4)		[18.2]	A C D F G H	良好	にぶい 黄橙		No.2 内面ヘラナデ
8	SJ9	C	土師器	甕	15	(18.0)		[3.6]	A B E F G H	普通	橙		内面風化顕著

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
9	SJ9	C	土師器	甕	60		5.6	[10.0]	A C D F G	普通	にぶい 橙		
10	SJ9	C	土師器	甕	10	(16.0)		[9.0]	A B C D F G	普通	橙		
11	SJ9	C	土師器	甕	25		(7.4)	[1.9]	A B C D F G	普通	明赤褐		外面被熱のため赤色化
12	SJ9	C	土師器	鉢	55	(12.6)	(4.4)	7.5	C F G	普通	にぶい 橙		No1
13	SJ9	C	土師器	甌	95	20.0	8.5	17.7	A C F G	良好	明褐灰		貯蔵穴No1 外面に大黒斑
14	SJ9	C	土師器	甌	95	26.6	8.5	30.4	A B D F G	普通	にぶい 黄橙		貯蔵穴No2

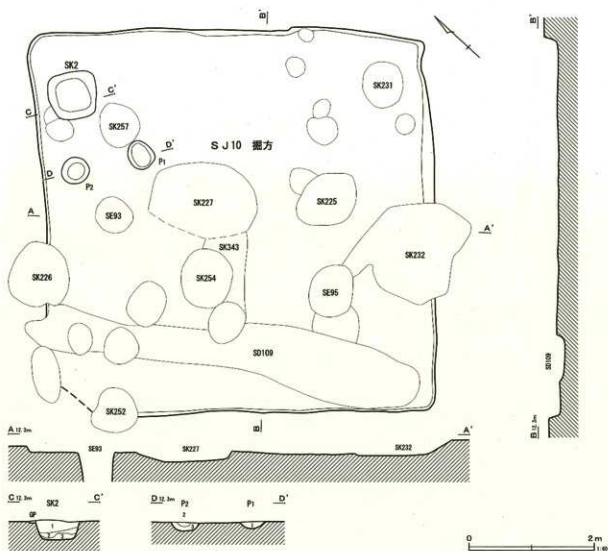


第45図 第9号住居跡出土遺物



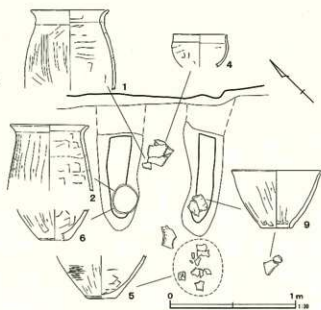
- S J 10
- | | | |
|----|-------|------------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 堆山ブロック(0.5cm)・機土ブロック(0.5cm)少 |
| 2 | 暗褐色土 | しまり強 粘性弱 |
| 3 | 暗褐色土 | 堆山ブロック(0.5cm)少 しまり強 粘性弱 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 堆山ブロック(0.5cm)・機土ブロック(0.5cm)微量 |
| 5 | 暗褐色土 | しまり強 粘性弱 |
| 6 | 暗黄褐色土 | 堆山ブロック(1.0~3.0cm)若干 しまり強 粘性弱 |
| 7 | 厚褐色土 | 炭化物微量 しまり強 粘性弱 |
| 8 | 暗赤褐色土 | 堆山ブロック層 (貼床) しまり強 粘性弱 |
| 9 | 暗赤褐色土 | 機土ブロック(0.5~1.0cm)・炭化物ブロック(0.5cm)若干 |
| 10 | 暗褐色土 | 機土ブロック(0.5cm)やや多 しまりやや強 粘性弱 |
| 11 | 厚褐色土 | 機土ブロック(0.5cm)・堆山ブロック(0.5~1.0cm) |
| 12 | 暗褐色土 | 炭化物少 しまりやや強 粘性弱 |
| 13 | 暗黄褐色土 | 堆山粒・炭化物微量 しまりやや強 粘性弱 |
| 14 | 暗黄褐色土 | 堆山粒少 堆山ブロック(0.5cm)やや多 しまりやや強 粘性弱 |
| 15 | 暗黄褐色土 | 堆山ブロック(0.5~1.0cm)多 炭化物少 しまりやや強 粘性弱 |
| 16 | 暗黄褐色土 | 堆山ブロック(0.5~1.0cm)極多 しまりやや強 粘性弱 |

第46図 第10号住居跡・カマド



- S J 10 SK 2
- 1 暗赤褐色土 黄土ブロック(1.0cm)微量 地山ブロック(1.0~2.0cm)稍多
炭化物ブロック(0.5cm)少
- 2 暗灰褐色土 黄土ブロック(0.5cm)微量 地山ブロック(0.5~1.0cm)多
炭化物ブロック(0.5cm)少
- 3 暗灰褐色土 地山ブロック(2.0~3.0cm)稍多 マンガン粒多
- ピット1・2
- 1 暗赤褐色土 黄土ブロック(0.5~2.0cm)多 炭化物ブロック(0.5cm)やや多
地山ブロック(1.0~2.0cm)少
- 2 暗褐色土 黄土ブロック(0.5~1.0cm)、炭化物ブロック(0.5cm)やや多
地山ブロック(0.5~1.0cm)少
- 3 暗赤褐色土 黄土ブロック(1.0~3.0cm)やや多 炭化物ブロック(0.5cm)
・地山ブロック(0.5~1.5cm)少

第47図 第10号住居跡(掘方)



第48図 第10号住居跡カマド遺物出土土状況